

第5期

麻生区区民会議報告書

～心がかよう魅力あるまち あさお～



2016年（平成28年）麻生区区民会議

第5期麻生区区民会議報告書の刊行によせて

第5期区民会議は平成26年7月にスタートし、2年にわたり活動してきました。ここにその活動経過と内容、提言をまとめ、報告書としてお届けします。

麻生区は、昭和57年に多摩区から分区し、川崎市の副都心と位置づけ、商業施設の充実を図るとともに、緑を多く残した宅地整備も行いました。その結果、人口も急増して、「芸術のまち麻生」を標榜する近代的な田園・文化都市として発展してきました。しかし、日本の抱える少子高齢化の波は確実に麻生区にも大きな影響を及ぼすことが予想されます。昨年、国立社会保障・人口問題研究所が発表した「政令市の区別男女5歳階級別データ」によれば、2035年までに麻生区では生産年齢層語り部が減少し、65歳以上の高齢層が増えると推計しています。このことは、若者が少なくなり、高齢者が増え、やがて人口減少へ向かい、地域が過疎化していく危険性を示唆していると考えられます。

●魅力あるまちづくりに資する検討テーマ設定

かかる状況を勘案して、第5期区民会議では、まず、子育て世代に対して麻生区の魅力をアピールして麻生区への流入を促進し、まちの活力維持・向上を図ることが必要と考え、さらに、麻生区には豊富な社会経験を積んだ貴重なノウハウを持った有能な人材が多く在住しておられます。そういった方々が地域社会に出てボランティアとして活躍していただければ地域活動の活性化が図れ、魅力あるまちづくりに資するものとして次の2つのテーマを審議課題として取り上げました。

- ・若い世代が住みやすいまちづくり
- ・市民活動・地域活動の活性化

このテーマについて審議・検討する専門部会を立ち上げ、検討会、勉強会、関連団体へのヒアリング等を進めてきました。特に、「市民活動・地域活動の活性化部会」では、地域のボランティア発掘の目的でフォーラム「健康寿命を延ばすには？」を開催し、参加者へ地域とのつながりの中で健康に暮らすためのヒントを伝え、気軽にボランティア活動へ参加しやすい動機づけを行いました。

●区民会議全体テーマの設定

区民会議の全体テーマとしては、上記両部会ともに麻生区の将来を見据えて、さらに活力ある魅力に満ちたまちに発展させていくという共通の目的をもって活動することから、全体テーマは、「心がかよう魅力あるまちあさお」と設定しました。

●取組が次につながることを！

この提言が区政に反映されるよう期待するとともに、取組の実現には区民会議委員の他、区民のさらなる力が求められるところです。そして麻生区が「心がかよう魅力あるまち」になりますことを期待して第5期区民会議の報告とします。



平成28年6月

第5期麻生区区民会議
委員長 金光 秀尚

【目次】

第1章	麻生区区民会議について	1
	1. 麻生区区民会議とは	
	2. 第1～4期区民会議の審議の流れ	
第2章	第5期区民会議について	4
	1. 審議課題の選定と審議の流れ	
	2. 会議の構成と役割	
第3章	各部会の審議と取組について	6
	1. 企画部会	
	2. 若い世代が住みやすいまちづくり部会	
	3. 市民活動・地域活動の活性化部会	
第4章	区民会議フォーラム～健康寿命を延ばすには？～	33
第5章	提言	37
	1. 「若い世代が住みやすいまちづくり部会」からの提言	
	2. 「市民活動・地域活動の活性化部会」からの提言	
	3. 第5期区民会議を振り返って	
【資料編】		45
	第5期区民会議委員・参与名簿	
	第5期区民会議スケジュール	
	第5期区民会議関連資料	
	麻生区区民会議ニュース	
	地域情報紙掲載記事	

第1章 麻生区区民会議について

1. 麻生区区民会議とは

川崎市では、平成17年に「暮らしやすい地域社会をめざして区民が中心となって課題の解決を図るために調査審議をする会議」として、「川崎市自治基本条例」に基づき「区民会議」が設置されました。

区民会議は、この条例がめざしている「市民自治によるまちづくり」を進めるために平成18年4月から各区に設置され、麻生区でもこれまで5期（1期2年、10年間）にわたって活動してきました。

平成26年7月から始まった、今回の第5期区民会議では、麻生区内の課題を抽出し、どのように解決していくかを、委員20名全員が一丸となって審議を進めてきました。

また、全体のテーマとして「心がかよう魅力あるまち あさお」を掲げ、ヒアリング調査やアンケート調査の実施など、机上の会議に留まらず、様々な実践的手法を取り入れ、区民や大学、関連業界等、多くの人の声を聴き、地域課題の解決策を検討し、平成28年6月、提言につなげました。



■区民会議の提言までの流れ

**ステップ1
課題の把握** ●区民の意見や地域の課題など、整理・分析をしました。



**ステップ2
テーマの選定** ●調査審議する課題・テーマを選びました。



**ステップ3
解決策の検討** ●解決の方向性など、様々な視点から調査審議しました。



**ステップ4
解決策の提言** ●調査審議でまとめられた解決策を提言しました。

2. 第1～4期区民会議の審議の流れ

第1期

心が響きあう地域づくり

H18. 7～H20. 6

○地域のつながり「あいさつ」がはじまり

- ・ 防犯パトロールの支援の検討（ベストや腕章等の貸与）
- ・ 冊子「あいさつが交わし合える地域づくり事例集」の作成（第2期で実施）

○高齢者が輝く地域づくり

- ・ 高齢者の地域参加をテーマに「老人いこいの家」の活性化案を検討
- ・ 「老人いこいの家」と「老人福祉センター」の愛称を募集
※ 「いこいの家」、「いきいきセンター」の愛称が選定

○地元農産物と地域の交流

- ・ 区の特長である「農」に着目し、区内小学校の食育担当の取組状況等、学校と地域との連携について調査



第2期

心が響きあう地域づくり

H20. 7～H22. 6

○市民活動推進

- ・ 「こども文化センター」について市民活動拠点としての視点からヒアリング調査等の実施
- ・ 積極的な広報、各施設間の連携の方法や区民が利用しやすい施設運用の検討

○文化芸術のまちづくり

- ・ 川崎・しんゆり芸術祭2009開催を受け、「市民参加の芸術祭」の取組を検討
- ・ 絵画展の開催や美化清掃活動に参加

○異世代間の交流

- ・ 専修大学、保育園等と協働して、世代間の交流を実施
- ・ 区内の施設で「エコバックづくり」や「エコかるた」による交流会の実施

○エコのまち麻生の推進

- ・ レストランあさおでモデル事業の実施
- ・ 生ごみ堆肥等で作った花や野菜の写真展や生ごみリサイクルと地産地消フォーラムの開催

○環境教育

- ・ 身近な地域から地球温暖化防止を進めるため、区内の取組事例等を調査
- ・ 学校向けの環境学習資料「麻生区エコカルテ」を作成し、区内小中学校に配布



○高齢者・障がい者などが暮らしやすい環境づくり

- ・高齢化の進展、近隣関係の希薄化などを受け、地域で支えあうコミュニティシステムの視点からヒアリング調査等を実施
- ・広報活動や地域の絆づくり、担い手の発掘と育成

○区民が主体となって進める芸術・文化のまちづくり

- ・情報発信の機能や中心となる担い手など、芸術・文化のまちづくりの形を検討するため、区内8つの文化芸術団体にヒアリング調査等を実施

○循環型のまち・生ごみリサイクル

- ・区民が実践できる「ごみの減量」や「リサイクル」に着目し、市民アンケートや先進自治体へのヒアリング等を実施。写真展、モデル事業を開催

○グリーンアップ・里山ボランティア

- ・麻生区の特徴である緑の減少をふまえ、これまで手つかずだった区内緑地について、市民ボランティアの力を活用しての保全活動を実施



○家具転倒防止に向けて

- ・区民にわかりやすく、コンパクトにまとめたパンフレットの作成・配布
- ・取組を支援するための体制の整備、普及啓発のための説明会や出前講座の開催
- ・住まい方に合った方法を提案できる専門技術者の人材確保
- ・市・区の関係部署が連携・協力し、財政的、技術的、情報面で支援する体制を整備

○家屋の倒壊防止の普及

- ・普及啓発パンフレットの配布、説明会の開催

○火災予防・火事発生への対応

- ・消火器等の設置推進・啓発

○あさお子育てフェスタを契機とした地域の子育て支援体制の構築

- ・あさお子育てフェスタの継続開催、地域で子育てを支援するネットワークの強化

○子育て世代が楽しめる豊かな芸術文化環境の区内区外への情報発信

○麻生区の「芸術のまち」構想の推進と独自ブランドの確立

- ・幅広い地域情報の収集と麻生区の芸術文化の発信を進めていく
- ・「しんゆり芸術のまち」をブランド化として確立



第2章 第5期区民会議について

1. 審議課題の選定と審議の流れ

I 地域課題の把握・整理

(1) 地域課題の把握

第5期の区民会議の審議テーマは、日頃から地域課題に関わる委員からの意見、市の統計及び市民アンケートの結果等を参考に検討し、これらを基に、区民にとってより身近な課題を抽出しました。

(2) 地域課題の整理

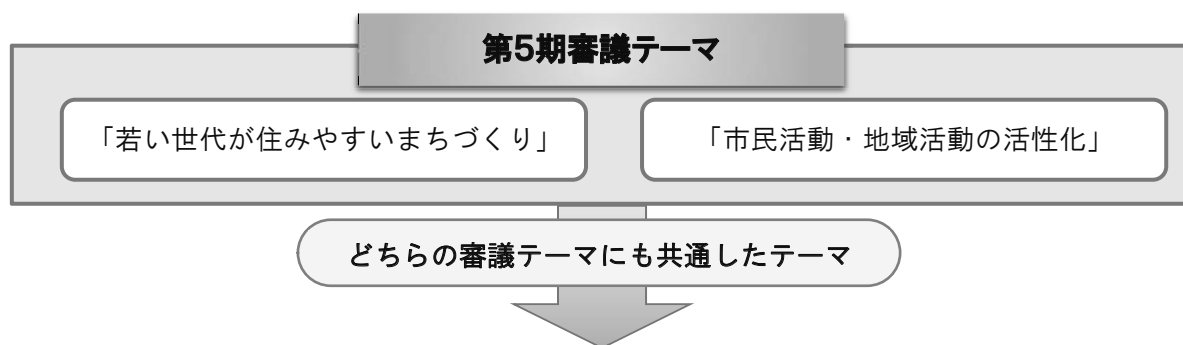
提案された内容を基に、課題の整理と分類分けをしました。

- ・ 少子高齢化が今後ますます進展し、2040年には65歳以上の高齢人口が35%を超えるという予測がある
 - ・ 生産年齢人口が減り、地域が活性化せず沈滞化していく
- (目標・方向性)
- ・ 生産年齢の若い人たちが入り込んでくるようなまちにするための取組が必要
 - ・ 生産年齢世代が積極的に地域に関わって活動してもらえる環境づくりが必要
 - ・ どうしたら若い人が住めるようになるのか、住みやすいところはどこかを考える
 - ・ 市民レベル・市民目線で、少子化を食い止めるために必要な取組を考える

- ・ 少子高齢化の進展
 - ・ 地域活動の担い手が不足している
- (目標・方向性)
- ・ 市民活動・地域活動に参加しやすい仕組みを考える必要がある
 - ・ 市民活動の担い手づくりや活性化が必要
 - ・ 町内会や自治会をベースに互助・共助の地域コミュニティづくりを考える
 - ・ 地域による高齢者・障がい者の見守りの仕組みの検討
 - ・ 高齢者等が外へ出るきっかけづくり、安心して外へ出られる環境を検討

II 審議テーマの選定

抽出された地域課題を基に、ワークショップ（ワールド・カフェ方式）を行い、区民にとって特に関心が高く、対策が必要な2つの審議テーマを決定しました。



第5期全体テーマ⇒「心がかよう魅力あるまち あさお」

Ⅲ 調査審議

20名の委員は審議テーマごとに「若い世代が住みやすいまちづくり」と「市民活動・地域活動の活性化」の2つの専門部会に分かれ、約2年をかけて、調査審議しました。



専門部会や全体会議における審議のほか、「子育てフェスタ」や「健康づくりのつどい」の来場者へのアンケートやインタビュー、区民会議フォーラムの開催、大学や関係団体等へのヒアリング調査等を積極的に進め、多様な意見を整理・分析して、審議の充実を図りました。

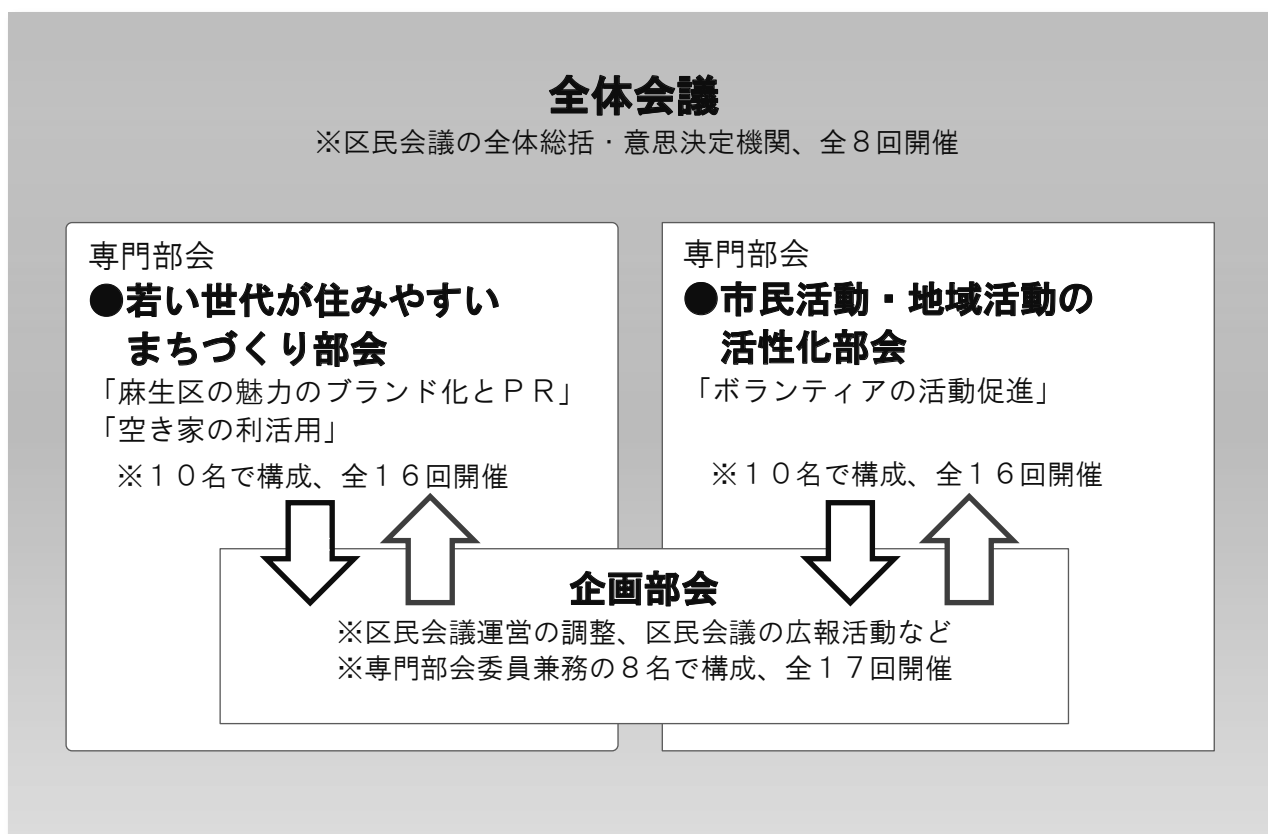
区民会議運営や広報活動を担う「企画部会」では、地域情報紙と連携する等、区民会議の認知度向上のためのPRを行いました。

企画部会と各専門部会を毎月開催し、勉強会や現地視察を行いながら、区民や地域に密着した調査を進め、議論と実践を重ねました。

Ⅳ 提言のとりまとめ

2年間の調査審議結果を基に、提言のとりまとめを行い、区長へ提言しました。

2. 会議の構成と役割



第3章 各部会の審議と取組について

1. 企画部会

企画部会は委員長や各専門部会長等を含む8名の委員で構成され、毎月第1金曜日に会議を開き、次のことを検討しました。

- I 審議・調査・提言すべき課題の整理
- II 区民会議（全体会議・各部会）の運営
- III 広報・広聴活動（PR活動・区民会議ニュース等）
- IV 区民会議フォーラムの開催
- V 区民会議報告書の作成

I 審議・調査・提言すべき課題の整理

第1回企画部会（平成26年10月10日）では、第1回全体会議（平成26年8月4日）に委員から出された地域課題に関する意見を基に、「若者が住みたくなるまちづくり」と「市民活動・地域活動の活性化」の2つのテーマで、席替え方式のワークショップ（ワールド・カフェ方式）を行いました。

ワークショップでは、2つのテーマに関わる個別の課題や検討の方向性について、活発な意見交換が行われました。最後に意見交換の内容を整理し、第5期では「若い世代が住みやすいまちづくり」と「市民活動・地域活動の活性化」の2つのテーマで調査審議を進めることとしました（2つの部会の設置は、平成26年11月21日の第2回全体会議で決定）。



II 区民会議の運営

各部会の審議や進行状況を、毎月確認する機会を設け、お互いの部会の取組状況について意見を交換し、各部会の審議の充実を図りました。

また、企画部会が区民会議全体の舵取り役を担うことで、委員間の情報共有や意思統一が図られ、効率的な運営となりました。

III 広報・広聴活動

平成26年度かわさき市民アンケートによれば、麻生区の区民会議の認知度は26.7%と、23年度のアンケート時の22.2%から4.5%上がっていますが、依然として低い状況にあるため、区民の認知度向上を目指し、積極的な広報・広聴活動を展開しました。

(1) P R活動

① 各種地域情報紙の活用

・区内の各地域情報紙（メディ・あさお、タウンニュース、マイタウン）、市政だより等々を活用し、区民会議への傍聴を広く呼びかけました。

② 区ホームページの活用

・テーマや審議内容を掲載し、区民会議への傍聴を広く呼びかけました。

③ 町会連合会への働きかけの強化

・町会・自治会は区民と直結した組織団体であり、区民会議ニュースの回覧やフォーラム開催の町連だよりへの記事掲載など、協力関係を築きました。

(2) 区民会議ニュースの発行

区民会議の認知度向上と区民会議の情報を区民に届けるため、区民会議ニュースを全6回発行し、進捗状況などを周知しました。

体裁：A4 モノクロ、部数：5,000部/回

配布先：町会・自治会、区役所、図書館、市民館、麻生市民交流館やまゆりなど

編集・印刷・発送準備：企画部会委員が担当

	発行時期	主な内容
第1号	平成27年3月	審議テーマの決定について
第2号	平成27年6月	各部会の調査・審議状況
第3号	平成27年11月	各部会の取組内容について
第4号	平成28年1月	区民会議フォーラム開催案内
第5号	平成28年3月	区民会議フォーラム報告
第6号	平成28年6月	報告書完成（提言）

(3) 広聴活動

区ホームページ、区民会議ニュースの意見募集、区役所ロビーに提案箱を設置し、随時意見を受け付けました。主な意見は、次のとおりです。



- 鶴亀松公園に見られるような子ども達の笑顔があふれる街に。
- 麻生区の文化水準（ポテンシャル）を有効に活用することが、麻生区の魅力のブランド化につながるのではないか。

IV 区民会議フォーラムの開催

市民活動・地域活動の活性化部会が企画検討した内容について、開催に向けての広報や役割分担などの調整を行いました。また、参加者へ区民会議活動の経過を報告するため、ブースを設置しました。

V 区民会議報告書の作成

各専門部会と連携し、約半年の期間をかけて、この「第5期区民会議報告書」の編集・作成に携わりました。

2. 若い世代が住みやすいまちづくり部会

「若い世代が住みやすいまちづくり部会」では、次のとおり調査・審議を進め、3つの方向性「(1) 魅力に関わる団体の連携」「(2) 魅力の情報発信」「(3) 空き家の利活用」を検討して、4つの提言を取りまとめました。

I 課題と方向性

■ 今後、高齢化とともに生産年齢人口が減り、空き家が増加することが予想される中、地域を活性化させる必要があります。



■ 若い世代が入り込んでくるようなまちにするための取組を考える必要があります。

II 審議テーマの選定

(1) 麻生区の魅力のブランド化とPR

対象として30代～40代の子育て世代を想定

(2) 空き家の利活用

対象として学生を想定

III 解決策の検討（審議内容）

(1) 麻生区の魅力のブランド化とPR

千葉県流山市の取組調査

子育てフェスタ内でのアンケート調査

大学へのヒアリング調査

- ①麻生区は「若い世代が住みやすいまち」としての魅力にあふれていること
- ②さまざまな団体が魅力づくりに取り組んでいること
- ③魅力の周知・PRが重要であること
- ④魅力づくりに取り組む団体の活動が、個別的・散発的であり、調和・連携が必要であること

(2) 空き家の利活用

川崎市まちづくり局の取組のヒアリング

不動産業者との意見交換

大学へのヒアリング調査

- ①空き家の利活用について、大学や事業者等により、さまざまな取組が進められていること
- ②空き家の利活用を進めていくには、地域の理解を得ることが重要であること

IV 提言内容の検討

(1) 魅力に関わる団体の連携

若い世代が「住み続けたい」「住みたい」と感じるための方策を、魅力に関わる団体が連携して検討・実施していく必要があります。

(2) 魅力の情報発信

「若い世代」をターゲットに麻生区の魅力をアピールしていくため、区のHPの改善や魅力的なキャッチフレーズを検討し、PRしていく必要があります。

(3) 空き家の利活用

区内での空き家活用事例を調査し、良い事例の紹介や若い世代に向けてシェアハウス等の有効利用を促進していく必要があります。

I 課題と方向性

麻生区では、今後、高齢化が進むことから、生産年齢人口の減少や、空き家の増加についても予想されています。

このことから、シニアの活躍はもちろんのこと、若い世代が転入し、安心して子育てをしてもらうことで、地域を活性化させることが大きな課題となっています。

そこで、「若い世代が住みやすいまち」について、「高齢化や生産年齢人口の減少」「空き家の増加」に関連する課題や課題解決の方法などを、様々な角度から自由に意見を出し合い、部会の方向性を検討しました。

高齢化や 生産年齢 人口の減少 について

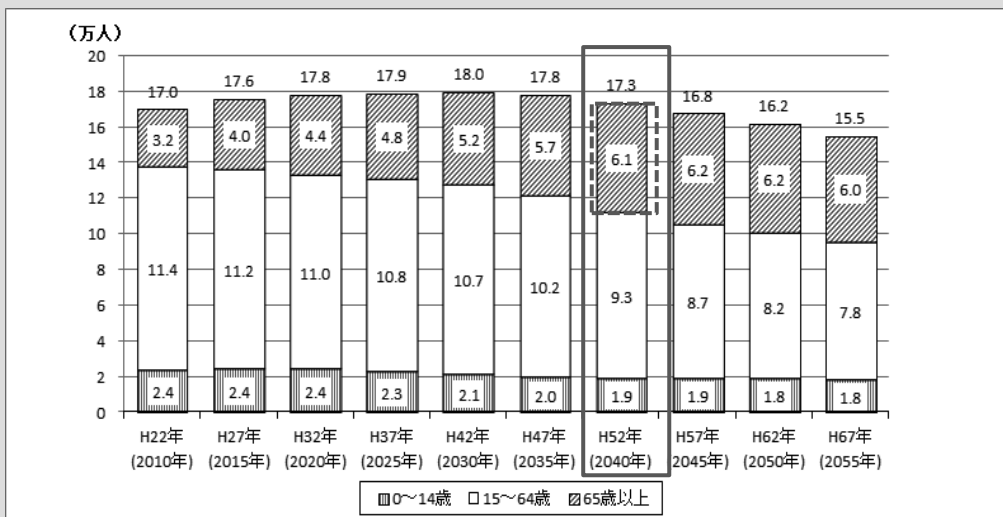
- 今後、高齢化が進み、地域活動の担い手がいなくなる
- 若い人に住んでもらい、参加してもらえる環境づくりが必要
- 子どもが地域に愛着を持ち、大人になっても住んでもらいたい
- 市民目線で少子化を食い止めるための取組を考えることが必要

空き家の 増加 について

- 空き家問題は若い世代を呼び込むことで解決につながるのでは
- 他都市で、空き家を学生のシェアハウスとして提供し、学生に地域活動を義務付けている例がある
- 空き家は駅から遠い場所が多く、若い世代が住みたいかどうか
- 地域の実情を把握しているNPOや不動産業者を間に入れる必要があるのでは

【麻生区の高齢化の予測】

今後、麻生区は川崎市の中で最も高齢化が進み、現在約23%の高齢化率（65歳以上の人口割合）が、2040年には35%を超えると予測されています。



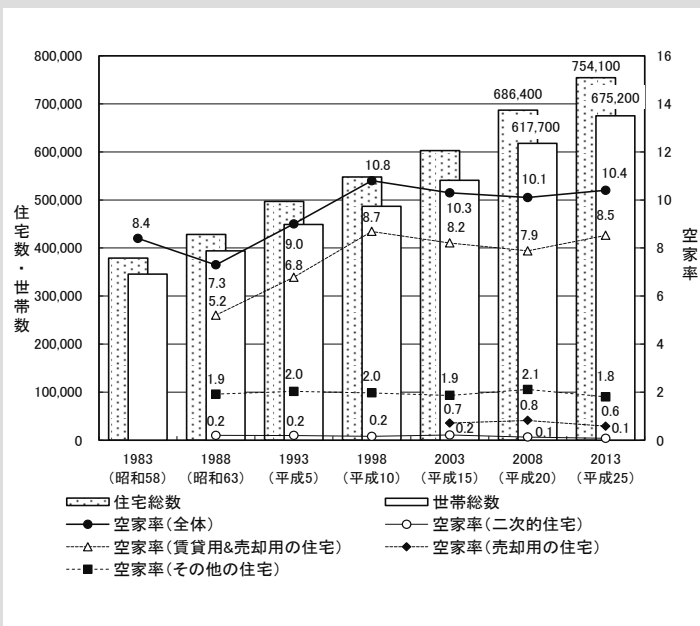
出典：
川崎市将来
人口推計
(H26.8)

【麻生区の空き家の状況】

区内には昭和40～50年代に多くの戸建て住宅地が開発され、現在では居住者の高齢化とともに、空き家が増加しています。

麻生区の空き家率は10.6%（平成25年住宅・土地統計調査）で、川崎市では多摩区、高津区に次いで3番目に高くなっています。

さらに、麻生区の高齢単身、高齢夫婦のみの持ち家率が高いことから、今後、空き家がさらに増加することが予想されます。



【表 川崎市の住宅数と世帯数及び空き家率】
（資料：H25住宅・土地統計調査）

そこで、若い世代の転入増加に成功している事例として、千葉県流山市の取組に注目しました。流山市で進めている子育て環境の整備や地域の魅力づくり、PRの内容を参考に、麻生区の「子育て環境」や「麻生区の魅力」について、以下に示すように意見を出し合い、部会の方向性を検討しました。

子育て環境 について

子育てフェスタが盛り上がっている。引き続きの開催を

子育ての不安を解消するための交流や情報交換が必要

小学校に入ると、意外にサポートの場がない

子どもの外遊びの環境づくり、安心できる居場所づくりが必要

麻生区の 魅力 について

人とつながりやすい、仲間づくりがしやすい

都心まで20分で便利であることが知られていない

緑の多さは麻生区の魅力

芸術・文化のまちが魅力

魅力のPRが不足している

Ⅱ 審議テーマの選定

意見交換を経て、「若い世代が住みやすいまち」にするため、調査検討すべき課題を大きく3つに整理しました。

- (1) 芸術・文化や緑、交通の利便性などの麻生区の魅力のPRが不足している
- (2) 若い人の住まいとして、増加している空き家を利活用することが必要
- (3) 親子が身近に遊べる場所や機会づくり、世代間の協力など、良好な子育て環境が必要

さらに、「(3) 良好な子育て環境」については、麻生区の魅力の一つとして考えられるため、(1)に含めることとし、本部会の審議テーマを次の2つに決定しました。

(1) 麻生区の魅力のブランド化とPR

- ・ 審議内容 住まいとしての麻生区の魅力を掘り起こしてブランド化し、さらにその魅力の区外への幅広いPR
- ・ 対象 麻生区への転入が最も望まれる、子育て世代を想定

(2) 空き家の利活用

- ・ 審議内容 生産年齢の若い人たちが入り込んでくるようなまちにするための取組の一環として、区内で増加している空き家の利活用
- ・ 対象 大学が多い麻生区の特徴を踏まえ、学生のための住まい（シェアハウス等）を想定

【調査審議の流れのイメージ】



Ⅲ 解決策の検討（審議内容）

(1) 麻生区の魅力のブランド化とPR

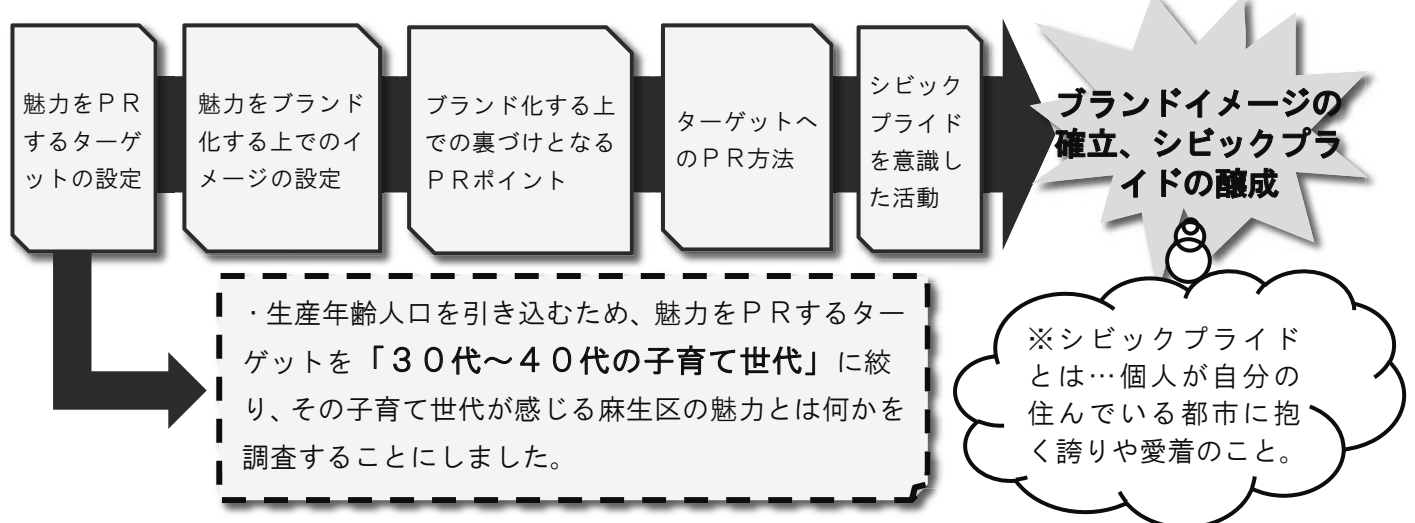
① 検討経過

子育て世代を想定し、麻生区の魅力のブランド化とPRをしていく上で、どのように検討していくのか、また、具体的な方策を探るため、先進的な取組を行っている他都市を調査しました。その結果から、「30代～40代の子育て世代」を対象を絞り、具体的な魅力のブランド化とPRについて検討を進めることにしました。そして対象の世代が感じる麻生区の魅力について、あさお子育てフェスタでのアンケート調査を実施して、魅力を特定し、PRの方法について検討しました。

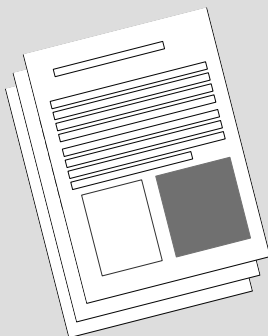
② 先進的な取組の調査

千葉県流山市の取組調査

- 目的 特徴的なブランド化・PRを行い、若い世代の呼び込みに成功しており、麻生区と人口総数が近く緑が多い点、都心から電車で20分であるといった特徴が似ていることから、流山市の取組を調査しました。
- 方法 平成27年5月、「PRに関することやブランド化するための方策等」について、質問事項を送り、文書により回答を得ました。
- 結果 流山市の取組調査の結果、魅力の情報発信を市内向けではなく、市外へ発信し、市外の人に流山市を知ってもらい、来てもらうことを目的としていることがわかりました。さらに、次のステップを踏むことで、魅力をブランド化していくことができるとわかりました。



【主な質問と回答】



Q. ブランド化におけるキーポイントについて。

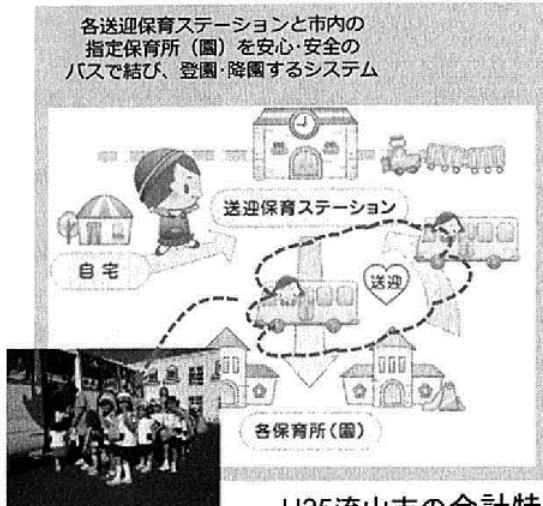
A. 本市マーケティング課では、市外発信と訴求に特化してやってきたところです。またキャッチフレーズである「都心から一番近い森のまち」についても、10年間ぶれずに使い続けていることで浸透している気がします。

Q. 非常にわかりやすい流山ウェルカムガイドについて、どのようにして製作をしたのか。

A. 製作についてはプロの業者に委託をして作成。ウェルカムガイドの設置場所について、市外から人を呼び込みたいので、マンションのモデルルーム等に置いたりしています。

駅前送迎保育ステーション

流山おおたかの森駅 H19年 設置
南流山駅 H20年 設置



H25流山市の合計特殊出生率 ... **1.50** (千葉県平均1.33)

図2 子育て世帯向け施策

保育園の新設・増設

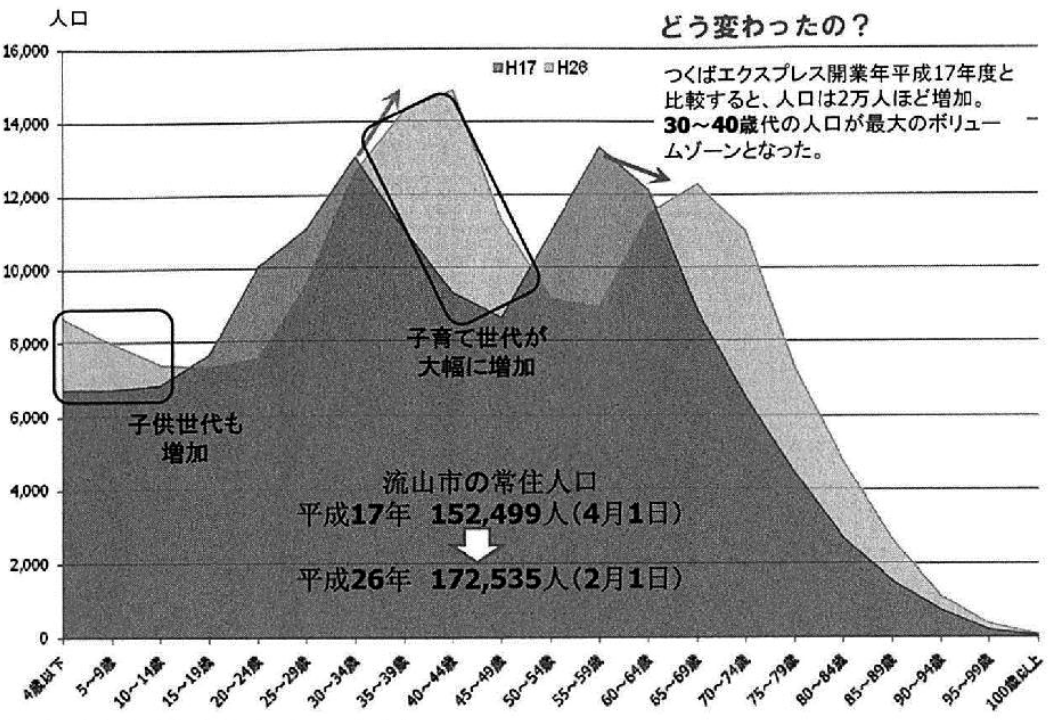
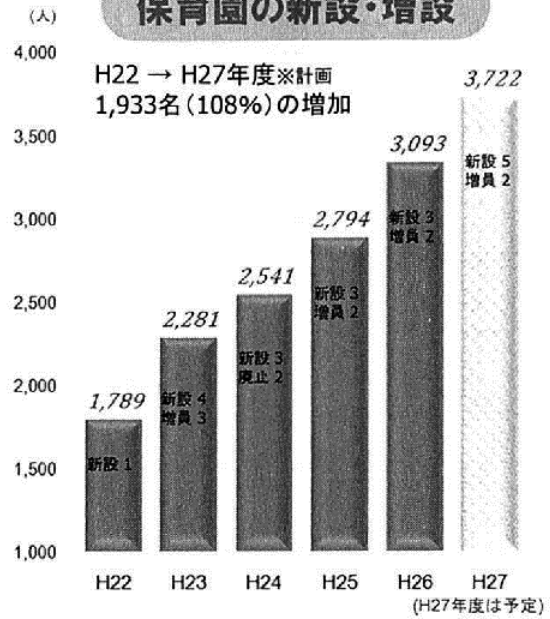


図4 流山市の年齢別人口の推移

出典：つなぎ、つくり、つたえる街の未来
「全国シティプロモーションサミット」

わたしたちの
「母になるなら、流山市。」

流山、ほっこり

もっと知りたい、
流山ってこんなところ

ウェルカムガイド

母になるなら、流山市。



妹尾薫さん
ヨガインストラクター

大塚まゆみさん
カメラマン

わたべに美さん
イラストレーター

山下絵梨奈さん
セラピスト

高木佐知子さん
時計メンテナンス

一歩進んだ子育て環境で、ママたちが夢を実現しています。

都心に近く、自然が豊か、さらに駅前送迎保育ステーションや子供向け教育・体験プログラム付きのマンションなど、市民が力を合わせ多様な子育て支援を進めている流山市、充実した環境を背景に、ママが起業や夢に挑戦する新しいライフスタイルが広がっています。また学童保育と同じ場所で起業支援を行う複合施設など、彼女たちの挑戦を後押しする動きも生まれています。



もっと知りたい

流山ってこんなところ

身近に緑がたくさん！

いつでも手頃にアウトドア。
緑が溢れる街づくり

流山市は都心から一番近い緑のまちをテーマに、
“緑をつなぐ”街づくり（グリーンチェーン戦略）に
取り組んでおり、美しい緑地の続く街並みづくりを進めています。
また、市内には公園や森が300か所以上もあり、
手頃なアウトドアを子供と過ごし、楽しむことができます。



子育て・教育環境も充実！ 楽しく子育て！

ママとパパ思いな
流山市の子育て環境

流山市では子育て環境の整備に力を入れており、
テーマは「働きながら子育てができる街」。
働きながら子育てする家族、子育てが一段落したら
再び働きたいと考える家族が暮らしやすい街を目指しています。
主な取り組みとして、

- 駅前送迎保育ステーションを設置
- 保育園を新設・増設
- 学童保育の増設

などがあります。

特に駅前送迎保育ステーションがあるので、
働きながら子育てする家族をサポートします。



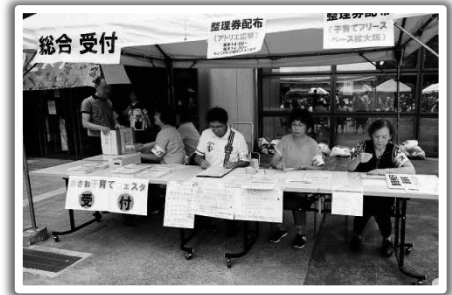
③ 子育て世代の感じる魅力の調査

先進的な取組の調査で、30代～40代の子育て世代を対象に魅力をPRしていくことに決めましたが、実際に、区内に住む30代～40代の子育て世代が、麻生区に対して、どのような魅力を感じているのかを調査することにしました。

あさお子育てフェスタでのアンケート調査

30代～40代の子育て世代が多く参加する、あさお子育てフェスタにて、アンケート調査を実施しました。

- 調査日 平成27年9月13日（日）
- 対象 あさお子育てフェスタに来場した保護者



調査方法

部会の委員が運営スタッフとして参加しながらアンケート調査を実施しました。

Q. 実際に麻生区に住んでみて、何を魅力として感じますか？

※子育て世代が魅力として感じるだろう次の項目について、「そう感じる、そう感じない」の5段階評価で調査しました。

調査項目				
交通が便利	通勤に便利	地域で仕事がしやすい	買い物に便利	緑が多い（自然環境が豊か）
治安が良い	教育水準が高い	医療施設が充実	文化施設が充実	芸術のまち
学校に通いやすい	地域の人間関係などがよい	コミュニティ活動が盛んなまち	子育てがしやすいまち	沿線に私立学校が多い

Q. 子育て世代を呼び込むため、麻生区にある魅力の中で、さらに何をPRしたらよいですか？

※次の項目のうち、2つまで選択可としました。

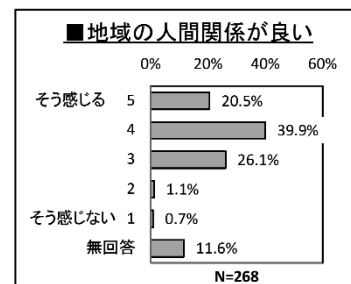
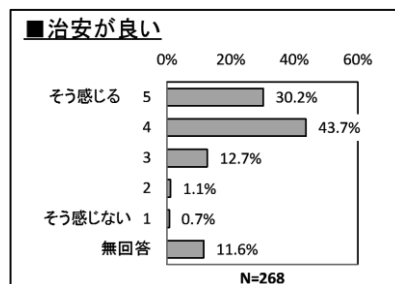
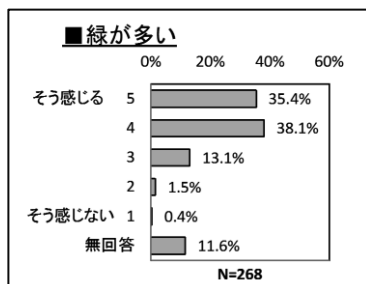
調査項目			
交通が便利	学校環境がよい	治安が良い	文化施設が充実
芸術のまち	緑が多い（自然環境が豊か）	その他（ ）	

調査結果

- アンケート回収数 268件

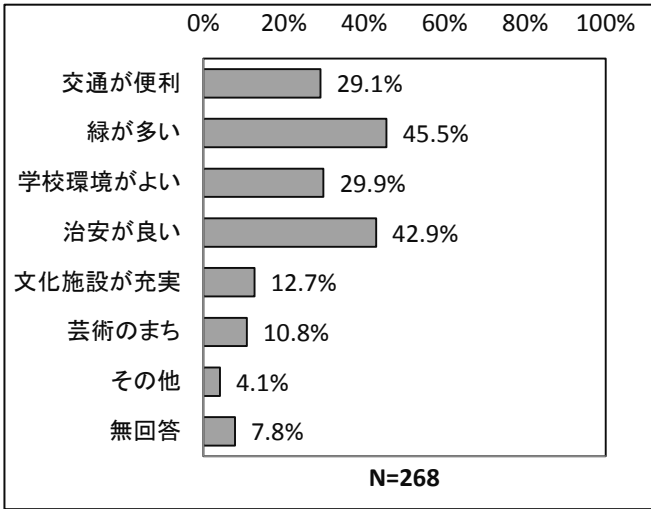
Q. 実際に麻生区に住んでみて、何を魅力として感じますか？

■子育て世代の感じる麻生区の魅力について、「緑が多い」が一番多く、次に「治安が良い」、「地域の人間関係が良い」、「交通の便が良い」も多いことがわかりました。



Q. 子育て世代を呼び込むため、麻生区にある魅力の中で、さらに何をPRしたらよいですか？

■アンケートの内、麻生区にある魅力の中でさらにPRしたらよいものとして、「緑が多い」、「治安が良い」が多いことがわかりました。

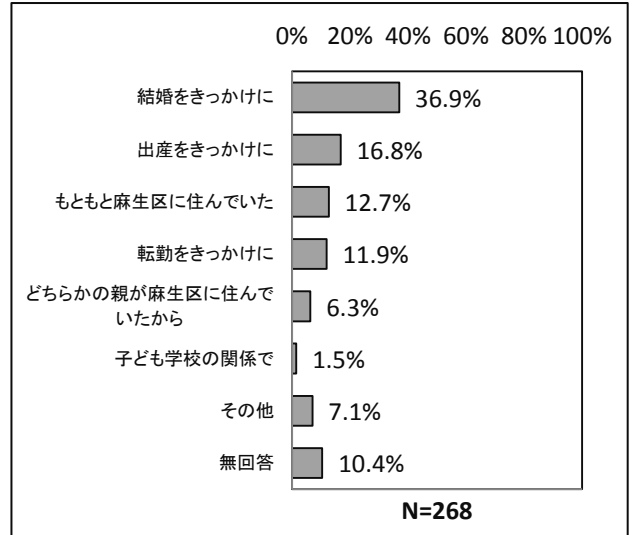


調査を終えて

- 分析をしていくと、「文化施設が充実している」、「芸術のまち」について、年齢が若い人ほどあまり魅力として認識していないことがわかりました。
- また、想定していたよりも、麻生区の子育て世代は麻生区に様々な魅力を感じていたことがわかり、区の特徴である芸術のまちについては、年齢が若い人ほど魅力として認識されていないと出ましたが、子育てフェスタのアンケート結果では、コンサートが非常に人気でした。
- このことから、若い世代から見た芸術・文化のイメージが高尚なものであると考えられ、音楽が芸術だということを、認識していないのではないかとということがわかりました。

Q. 麻生区に住むことになった経緯について教えてください

■さらに別の項目である麻生区に住むこととなった経緯について、「結婚をきっかけにした人が一番多く、次に「出産をきっかけにした人が多いことがわかりました。



大学へのヒアリング調査

魅力の調査

平成27年10月6日、委員が直接大学へ伺い、空き家の利活用に係るヒアリング調査と併せ、区の魅力についてもヒアリングを実施しました。

- 目的 学生または学校から見た麻生区の魅力を探るため
- 結果 新百合ヶ丘周辺大学の学生から見た麻生区の印象について、安全で緑が多く、住みやすい街であるといった印象を持っていることがわかりました。

昭和音楽大学

Q. 麻生区の印象、魅力は何ですか。
 A. 音楽のまちとして、「アルテリッカ」や「しんゆり映画祭」など、芸術が身近にあり、昭和音大生が暮らす街として、素晴らしい環境だと思えます。



和光大学

Q. 学校説明会等でこの地域の魅力をPRすることがありますか。
 A. 和光大学のPRとしては、新宿から〇〇分、新横浜から〇〇分、といった風に、地方の人でも分かりやすいPRをしています。

④ 提言の方向性の検討

子育て世代の感じる魅力の調査から、麻生区のイメージは「緑が多い」、「治安が良い」、「交通が便利で良い」、「人間関係が良い」ことがわかりました。この調査でPRすべき麻生区の魅力がわかり、これらを広く区民に知ってもらうこと、さらに麻生区の魅力で足りていない部分を充実させることについて検討しました。

具体的なPRの方法について

PR方法について、地域情報紙の有効性が認められる。

区外の人が見るのはホームページが一番多いことから、このページの充実とデザインの検討が必要。



魅力をPRする方法として、キャッチフレーズを作るのはどうか。

キャッチフレーズの作成については、区民会議の委員だけで検討するのではなく、ここでは例を示し、区民に募集をかけるなどして試みるのがよいかもしれない。

各魅力の充実について

麻生区には、若い世代を呼び込むための魅力となる要素が数多くあるが、その魅力が認知・認識されていない。

新百合ヶ丘駅を中心に、品のある繁華性や交通の利便性等、さらなる向上が期待される。



魅力資源に関わる各主体（団体等）について、それぞれの地域資源を活かして活動をしているが、若い世代に魅力を伝えるため、各主体の活動等を認知して連携していくことが必要ではないか。

魅力発信のイメージ図

緑、自然が多い



子育てしやすい



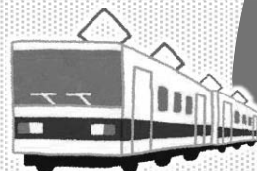
芸術のまち



- ①魅力資源の充実
- ②若い世代に魅力を知ってもらう方法
- ③若い世代に魅力を伝えるため、各主体が連携していく方策



治安が良い



利便性が良い

「若い世代が住みやすいまち あさお」を周知していく

(2) 空き家の利活用

① 検討経過

区内で増加している空き家を活用し、学生のための住まい（シェアハウス等）として利用できるのか、その具体的な方策を探るため、他都市の事例、川崎市まちづくり局の取組を調査しました。また、実際に麻生区にある不動産業者から空き家に対する意見を聞き、区内大学の学生の住まいのニーズについて調査し、空き家の活用方法について検討しました。

② 空き家の利活用の事例、川崎市まちづくり局の取組のヒアリング調査

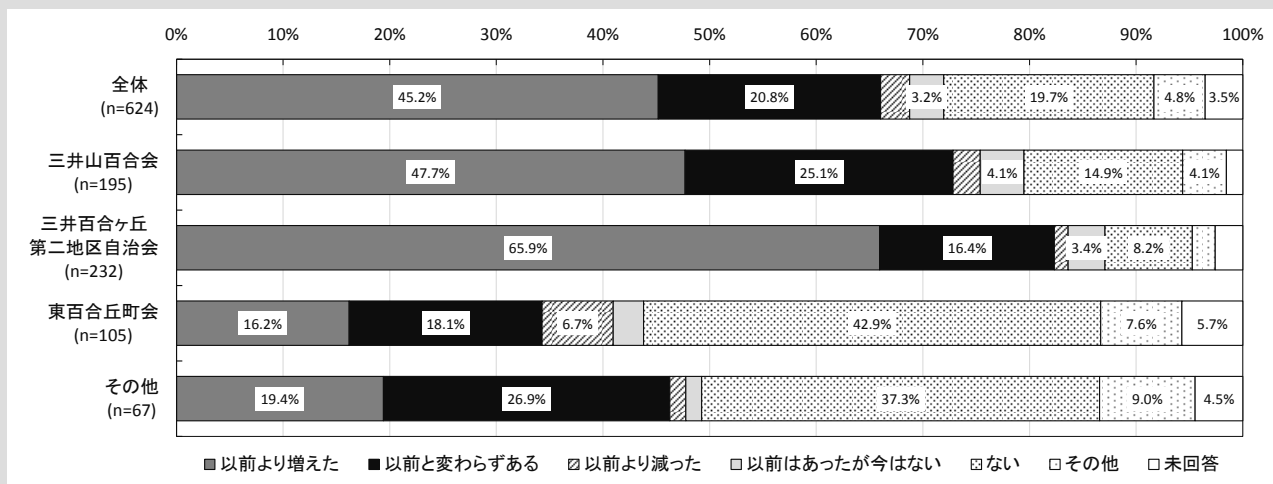
大学における空き家活用の取組事例の調査

大学名	要 旨
日本工業大学	日本工業大学の学生が、高齢化の進む武里団地（埼玉県春日部市）に居住し、地元自治会と連携しながら地域活性化を目指す
多摩大学	多摩市・UR都市機構と連携協定を締結し、学生のUR賃貸住宅への居住促進による地域活性化を目指す
関東学院大学	横須賀・谷戸地域の住宅リノベーションに学生が挑戦。シェアハウスとして活用するとともに、地元NPO団体など協働で地域の活性化にも取り組む
京都産業大学	京都産業大学と三重県いなべ市との連携協力により、京都産業大学法学部生によるグリーン・ツーリズムの推進のための空き家活用策の提案

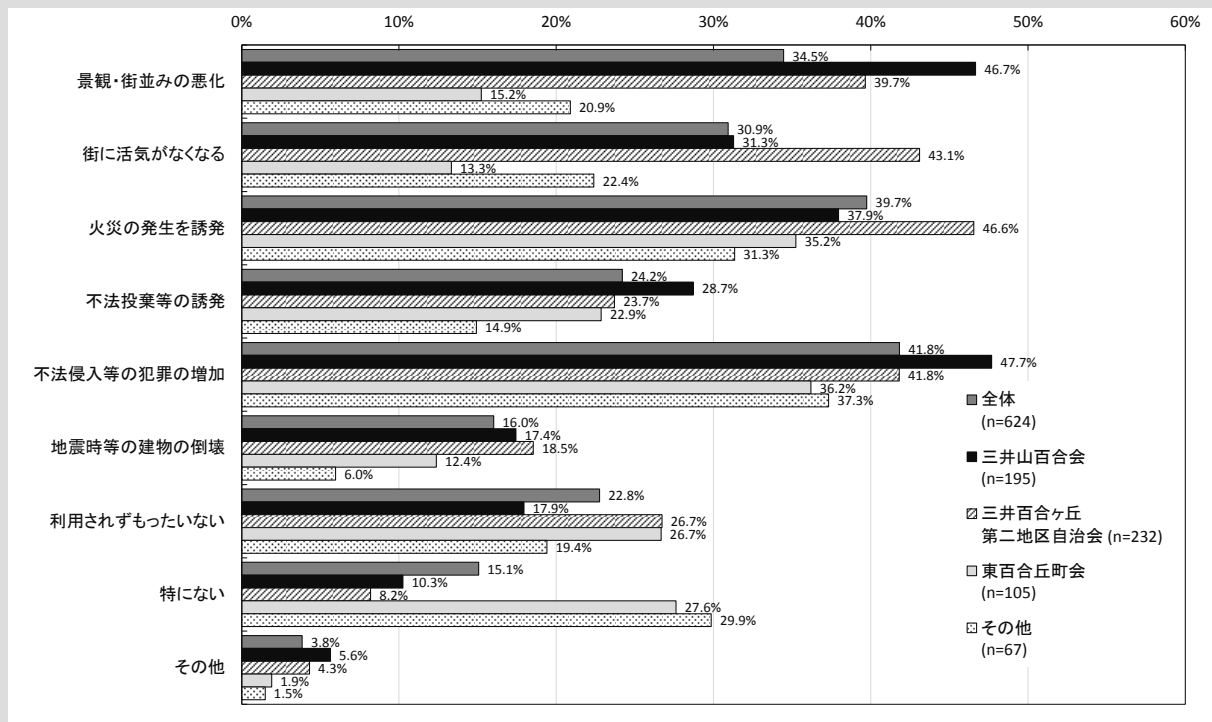
川崎市まちづくり局への取組のヒアリング調査

- 目的 具体的な内容を検討する前に、川崎市まちづくり局で進めている空き家対策の事業について、ヒアリング調査を実施することにしました。
- 結果 市では、主に空き家の予防的取組として、利活用・流通促進を検討していることがわかりました。また、麻生区王禅寺と東百合丘で行われたアンケートについて、同様の内容を平成27年度第1回かわさき市民アンケートにて実施していくこともわかりました。（アンケートの結果については資料編P55～60に掲載）

●近所の空き家の増減



● 空き家についての困りごと等



出典：王禅寺西2丁目・東百合丘4丁目居住者に対する「現在のお住まいに関するアンケート調査」平成26年7月～平成27年4月に、まちづくり局が3町会・自治会に配布・回収を依頼して実施。

これらの内容から、具体的に麻生区で実現可能なことはあるか、不動産団体に意見を聞いてみることにしました。

③ 不動産業者との意見交換

区内の空き家について、不動産業者としてどのような対応ができるか、意見交換を実施しました。

委員

学生が下宿先を探したいといった場合、不動産業界で対応は可能か。

業者

委員

空き部屋を貸してもよいという大家さんはいる（高齢者）。実例もあるが、細かなルール作りが必要。細かなルールがないと互いに溝が広がってしまうことがある。

業者

委員

シェアハウスや地域のカフェみたいに、地域の住民が活用できるようにできないか。

業者

委員

シェアハウスや地域のカフェのように活用したい場合は、人が集まりやすい、流れのある場所がよい。

業者

不動産業者との意見交換の結果から、具体的に大学の学生の住まいに関するニーズを把握するため、区内大学にヒアリング調査を実施することにしました。

④ 大学へのヒアリング調査

学生の住まいに関するニーズを探るため、4つの区内大学（昭和音楽大学、日本映画大学、明治大学、和光大学）へ、ヒアリング調査を実施しました。

■実施日 平成27年10月6日

■対象 大学職員または学生

■方法 部会の委員が直接大学へ伺いヒアリング調査を実施しました。

■結果

- ・日本映画大学では、シェアハウスについて学生にアンケートを実施しており、179名の回答のうち、71名がシェアハウスをしてみたいと回答しています。
- ・その他の大学については、具体的な学生のニーズは調査していないが、昭和音楽大学であれば、楽器を弾けるような防音設備の整った部屋であったり、和光大学であれば、自転車で通える範囲の住居を選ぶ傾向にあったり、それぞれの大学の特性に応じた住宅環境のニーズがあることがわかりました。
- ・昭和音楽大学については、地元の理解・協力がああり、区役所の支援があれば、シェアハウス等の事業について検討する余地があることがわかりました。
- ・また、学生の寮に対する意識について、昔は4人部屋、2人部屋が普通であったが、最近は1人部屋が主流となってきており、学生の気質が変わってきていることがわかり、その辺りを考慮して検討する必要があることがわかりました。

主な質問内容と回答

日本映画大学

Q. シェアハウスのニーズ等は把握していますか。

A. シェアハウスについて、学生にアンケートを取って、実態調査をしています。また、URと、百合ヶ丘団地等でのシェアハウスの可能性を打合せしています。

和光大学

Q. 空き家を活用した事業等はありませんか。

A. 昨年度、和光大学教員が不動産会社と協力して、岡上地域で空き家が多いことから、不動産屋が有しているアパートの一室を学生がデザインするコンテストを実施したことがあります。



⑤ 提言の方向性の検討

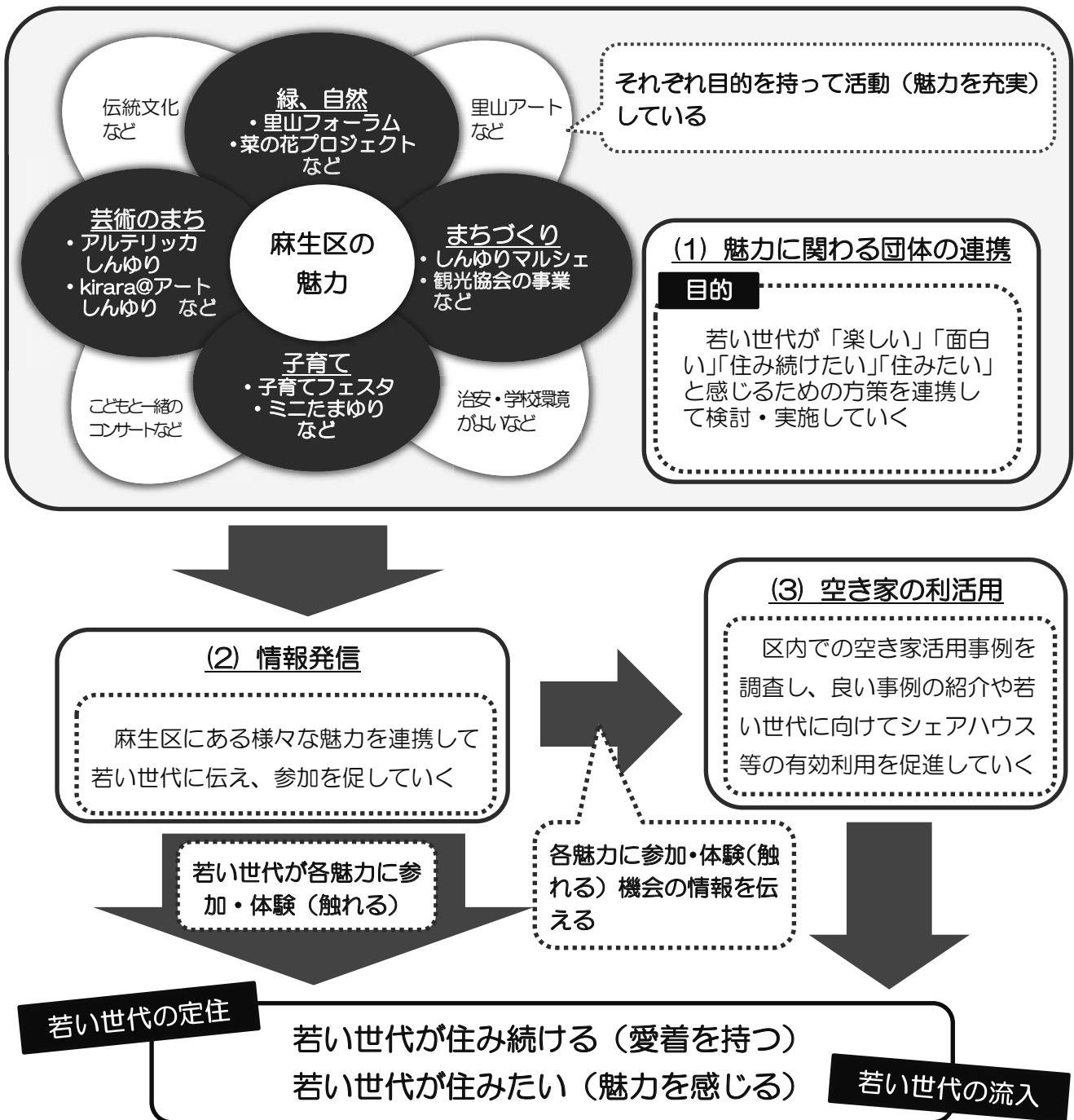
- 調査の結果から各大学の特色・事情によって、シェアハウス等のニーズが変わってくるわかりました。
- 空き家の活用方法については、行政が働きかけ、自治会などに空き家の情報提供を促し、その空き家情報を世代間交流のホームシェアを行っているようなNPO団体などに流していくことで、空き家を使いたい人とうまく繋げることができるのではと、検討しました。
- また、空き家に学生や若者だけで住むことで、騒音やゴミ出し等のトラブルが起こる可能性があることから、空き家をシェアハウスとして活用していくのであれば、まず、地域へ説明を行い理解を得て、仲介に入る業者や団体が細やかなルール作りをしていく必要があることがわかりました。
- 空き家の事例について、既の実施しているところの実情を聞き、それを広く周知して、対応を考えていくとよいのではないかと検討しました。

IV 提言内容の検討

以上の検討の結果、次の図に示すとおり麻生区にある様々な魅力について、それぞれの団体がイベントや活動を通じて広めています。さらに若い世代に向けた魅力発信のため、「(1) 魅力に関わる団体の連携」と、「(2) 情報発信」が重要です。また、若い世代に向けた魅力の一つとして地域ぐるみの「(3) 空き家の利活用」の取組が必要です。

以上を踏まえ、提言を行います。

提言のイメージ図



この提言の実現に向け、区民のみならず一人ひとり、行政の各部署、また、関係する団体が協働して取り組むことが期待されます。また、現在の麻生区の様々な魅力が成熟していき、既存の良好な住宅地の環境とコミュニティが維持されていくことが目指すべき将来像となります。

3. 市民活動・地域活動の活性化部会

I 課題の把握

「市民活動・地域活動」に関する課題について、様々な角度から意見を出し合い、検討しました。

- ・ 事務量が多く事務局の負担が大きい
- ・ 会場（活動の場）の確保が難しい
- ・ 高齢化が進んで活動の担い手が減っている

活動団体への運営支援

- ・ 中学生に参加を呼びかけたらどうか？
- ・ 担い手の育成とどう活かすのかが問題
- ・ 地域へ活動を案内するコーディネーターが必要
- ・ 学んだ技術や特技を生かせるとよい

地域人材の育成と人材活用

- ・ ボランティア活動をする上で励みになるものがあるとよい
- ・ 楽しみや仲間が増えることをアピールできるとよい
- ・ ボランティアを学ぶ・知る機会を提供する
- ・ ボランティア予備軍が多いので背中を押す仕組みが必要
- ・ 有償ボランティアとは何だろう？
- ・ 参加しやすくなるようにポイント制度などが必要では？

ボランティアの活動促進

情報発信の環境整備

- ・ 元気なシニアを活用できないか？
- ・ 閉じこもり気味のシニア等を外に出す仕組みがあるとよい
- ・ 退職者セミナーを開催するとそれをきっかけに参加する人が多い
- ・ シニアが輝く地域づくり。居場所をつくりたい
- ・ 地域で世代間の交流が必要ではないか？
- ・ 障害を持つ人を理解するために交流の機会を

シニア等の地域への参加

各団体の相互理解

- ・ 興味のあるテーマについて情報提供があれば、それをきっかけに参加するのではないかな？
- ・ 市民団体等が発信している情報が伝わっていない
- ・ 区民もどこに情報があるのかわからないのではないかな？
- ・ 各機関でよいことをやっているのに伝わっていない

- ・ 地縁型と知縁型（テーマ型）コミュニティでは担い手づくりや活性化の方法が異なるのでは？
- ・ 麻生市民交流館やまゆりには、約600の市民団体が登録されている
- ・ 町内会・自治会では、美化活動、防災訓練など、顔が見える関係づくりを目指して活動している
- ・ 同じ意識を持つ団体同士が連携できる仕組みがあるとよい

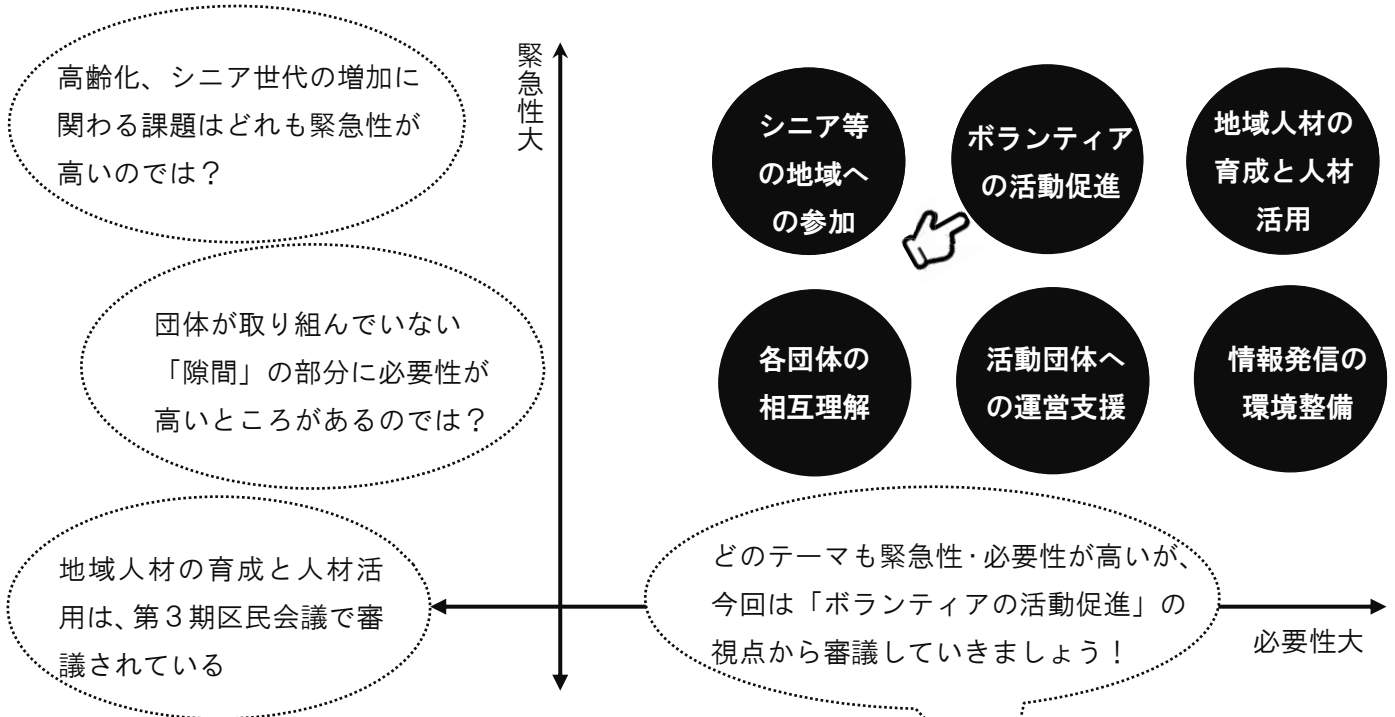
対象を定めて、それに応じて必要となる情報提供や支援を考えたらどうだろう？

そもそも「市民活動」「地域活動」の言葉は、人によってイメージが異なるのでは？



II テーマの選定

出された意見を6つの項目（方向性）に分け、緊急性と必要性を基準に優先テーマを選定しました。



👉 テーマの選定



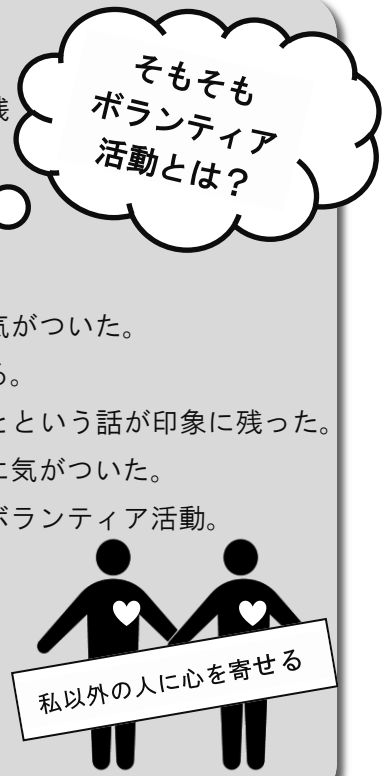
最優先テーマ	ボランティアの活動促進
優先テーマ	情報発信の環境整備 シニア等の地域への参加
全体に係る課題	活動団体への運営支援

ボランティア活動のイメージの共有

ボランティアを知るため、麻生市民交流館やまゆりで開催された市民活動実践入門講座の一コマ「ボランティア活動とは？」に参加し、ボランティア活動について理解を深めました。

講座に参加して気がついたこと

- 話し合いの中で、ボランティア活動の受けとめ方が人によって異なることに気がついた。
- 報酬の問題ではなく、人との関わり合いを求めたいがために活動する人もいます。
- ボランティアとは、あなたがいるから私がいる、**私以外の人に心を寄せること**という話が印象に残った。
- ボランティア活動に関わるにあたって、肩ひじを張る必要はないということに気がついた。
- 社会奉仕以外にも色々な形がある。隣の家の玄関先を掃除することも一つのボランティア活動。
- 挨拶など、人と人が心を通わせることが何よりも大切であることを知った。挨拶がきっかけとなって、行動に移し、その積み重ねによってグループができて、ボランティア活動に発展していくのではないかと。
- 多様な社会の中でも、同じ人間として差別なく理解し、暮らすことの重要性がボランティアの根底にあるのだと思う。



Ⅲ 解決策の検討（審議内容）

ボランティアに関する様々な課題や気がついた点について意見を交わし、次の「ボランティアの意識や行動の変化」をまとめました。

ボランティアーの意識や行動の変化



STEP 1 ボランティア活動に関心を持つが、内に籠っている段階

- 定年を迎えたシニア世代の中には、何らかのボランティア活動をしたいと思っている人が多いのではないか。関心のある人に情報を届ける必要がある。
- 学生や主婦、現役世代等も、大きなイベント開催や災害発生をきっかけに、ボランティア活動への関心が高まる。中学生など若い人が活動に参加すると、様々な意見をきくことができ、団体にとっても活動に幅が出る。



STEP 2 何らかのきっかけで一步を踏み出してみる段階

- ボランティア講座、体験学習、短期のボランティア募集、相談窓口、町会役員の輪番制、仲間からの誘い、妻から背中を押されてなど、ボランティア活動に参加する際は、何らかのきっかけがある。
- ボランティア活動に参加しやすい環境という部分では、団体への信頼性や有償という面も一つの目安となる。参加へのハードルを下げるのが大切。



STEP 3 活動のプレイヤーとなり仲間ができ、活動が楽しいと感じる段階

- 短期のボランティア活動を長期的な活動へとつなげる仕組みが必要である。
- ボランティア活動が重荷となって離れていくことも多い。それを防ぐためにも、一緒に活動する仲間や居場所が必要である。
- 楽しいと感じる反面、長期的な人間関係の煩わしさ、ストレスを感じることもある。各個人の性格によるところが大きいですが、乗り越えて続けて欲しい。



STEP 4 やむにやまれず突き動かされる心、自発的な心が芽生える段階

- 楽しいだけのボランティア活動は飽きられる。継続のためには当事者として活動を自分のものにしていく必要がある。何をやりたいのか心から湧きあがるものが大切。そのテーマやきっかけは1人1人異なる。
- 共育（ともいく）という、行う側と受ける側が共に成長するという考え方もある。ボランティアでも、リーダーの影響を受けてプレイヤーは成長する。



STEP 5 活動のリーダー等になり、同じ意識を持つ仲間を集めていく段階

- ボランティア活動はプレイヤーの他にマネジメントを担う人がいて成り立つ。ボランティア活動を続けるためには、「ボランタリー」の他にも「事業性」という団体運営の視点も持つ必要がある。
- 社会的に求められている活動であるが、特定の人への負担が増え、継続が困難に陥る団体もある。団体の相談にのってくださるところが必要である。

※ボランティアの意識や行動の変化を分類したものでSTEP5を目標とするものではありません。

（具体的な審議内容の設定）

市民のボランティアに対する意識を把握するため、川崎市や国が行った様々な調査※を確認しました。

国の実態調査では、情報の不足や活動への信頼性等の様々な要因により、「ボランティアに少しでも関心を持った人は約62%もいるにもかかわらず、過去3年間にボランティア活動経験がある人は約26%しかない」という結果が出ていました。

そこで、ボランティアを募集する団体とボランティア活動をしたい人との間にミスマッチが発生している現状を考慮し、本部会では「ボランティアの意識や行動の変化」の内、STEP2（STEP1から3への過程）を焦点とし、次のとおり、「具体的な審議内容」を設定しました。

※平成25年度 市民自治の実態等に関する調査（川崎市）
平成25年度 川崎市高齢者実態調査（川崎市）
平成26年度 市民の社会貢献に関する実態調査（内閣府）
平成27年度 新たな総合計画に関する市民意識調査（川崎市）



具体的な審議内容の設定



ボランティア活動をしたい人や関心のある人が
ボランティア活動への一歩を踏み出せるように
受け取りやすい情報発信の仕方やルートなど
気軽に参加できる仕組みを検討する

（対象の設定）

ボランティア活動に気軽に参加できる仕組みを検討する上で、比較的時間に余裕のあるシニア世代をメインに捉えて審議を進めることにしました。

※ただし、地域には、シニア世代の他にも、子育て世代や現役世代、中・高校生等様々な層が存在し、いずれの層も活動の担い手となりうることを、これからの審議でも意識していく必要がある旨、確認しました。

■主な意見

- シニア世代は、自分を高齢者と思いたくないという意識が強い。
- 団塊世代が定年退職を迎え、多くの方がボランティア活動に参加するのでは、という予想が以前にあった。しかし実際は60歳になってすぐに地域に入るといふ人は少ない。70歳近くになって入る人が多い。
- 65歳～70歳は趣味に没頭している方が多いのではないかと。そのような人達にボランティア活動をしたという気持ちになってもらう仕組みが必要。



対象の設定



何をするでもなく
なんとなく毎日を“もやもや”と過ごしている
シニア世代を想定し
ボランティア活動の参加のきっかけをつくる

(仕組み・仕掛けのイメージ)

「ボランティアの意識や行動の変化」のSTEP 2の過程を5段階※に分け、知る・関心を持つの段階を切り口として、参加への仕組み、仕掛けのイメージを検討しました。

※川崎市シティプロモーション戦略プラン「情報の受け手の段階に応じた情報発信」を参考



■主な意見

- 男性は照れ屋な人が多い。「妻に勧められて」など、背中を押す仕組みが必要となる。
 - ボランティア活動を知ってもらうには、様々な媒体（雑誌、HP、地域情報紙、掲示板、町会の回覧など）の活用が効果的だと思われる。町会の回覧は妻が見る場合が多いので、妻に向けたPRが有効である。
 - 「関心を持つ」以降は個人の価値観に左右されるのではないかと。社会のため、余暇のため、健康のため、特技を披露するためなど、人それぞれ理由が考えられる。それぞれにあったアプローチが必要だと思う。
 - シニア世代の関心を寄せるキャッチフレーズとして、「健康寿命」がある。健康寿命を延ばすには、運動や食事が大切といわれてきたが、昨今は社会参加、生きがいや仲間作りも大切な要素になっているようだ。
 - 健康には、「教養」・「教育」ならぬ、「今日、用があること」・「今日、行くところがあること」が大事といわれている。
 - ボランティア活動に絡めて「体」の健康面の他、「心」の健康面も大切であることをシニア世代に伝えたい。
- ▶ 審議の結果、健康に関する区のイベント「麻生区健康づくりのつどい」でブースを開設し、キャッチフレーズとして

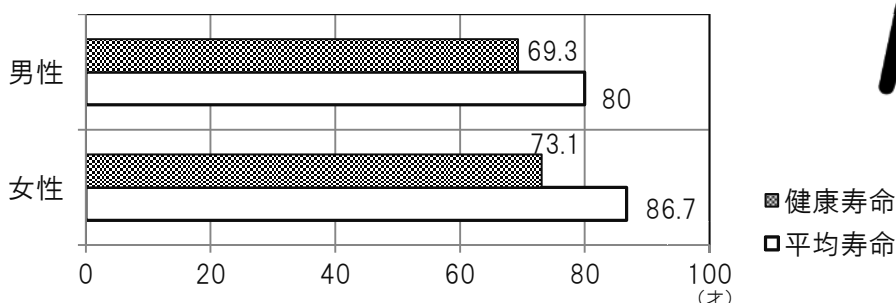
ボランティア活動に参加して健康寿命を延ばしましょう！

を掲げ、そのPR効果を試すとともに
ボランティア活動について、来場した区民の声を聴いてみることになりました。

Q.健康寿命とは？

健康寿命は、健康上の問題で日常生活が制限されることなく、健康で生活できる期間のことです。
平均寿命と健康寿命の差は日常生活に制限のある期間を示しています。
川崎市民の平均寿命と健康寿命の差は、男女共に10年以上あり、
健康寿命を延ばして、生活の質の低下を防ぐことが求められています。

川崎市の平均寿命と健康寿命



※出典：かわさきいきいき長寿プラン（平成27～29年度）

（区民との意見交換の実施）

麻生区健康づくりのつどいで区民会議ブースを開設し、ボランティア活動について、来場者と意見を交わしました。聞き取りの際は「ボランティア活動」という言葉の範囲はあえて定義せず、来場者自身のイメージで自由にボランティアについて話をして頂きました。



日 時 平成27年10月31日
午前10時～午後3時
場 所 区役所前広場
健康づくりのつどい会場内
回答者 127人
男性45人 女性82人



麻生老人福祉センターへの現地調査

- 平成27年9月10日、委員4名が「麻生老人福祉センター」を訪問し、施設管理者に対してヒアリングを実施しました。

目的 施設利用者がボランティア活動に興味を持ちやすい環境であるかどうかを把握し、利用者をボランティア活動へ促す方法を探る。

結果 利用者はスポーツや講座等、何らかの目的を持って施設を訪れているので、他のこと（ボランティア活動）に関心が向きにくい環境であるが、ボランティア活動の魅力や、ボランティアを必要としている団体、相談窓口等の情報を提供することで、利用者の関心を引くきっかけになりうる。

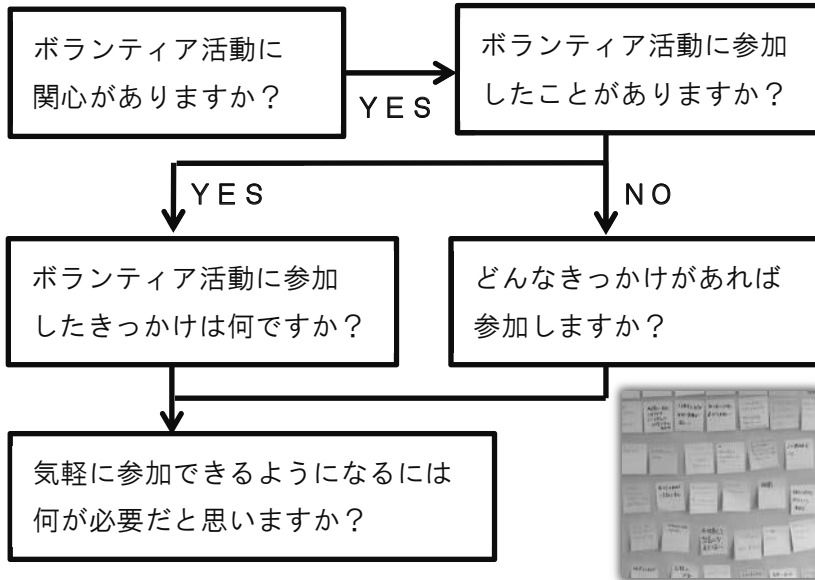
今回の現地調査が契機となり、区民会議委員の働きかけで、市民活動のチラシ（麻生市民交流館やまゆり発行）を麻生老人福祉センターに配架する取組が始まりました。



多くのシニア世代・高齢の方が集まる麻生老人福祉センター

詳細な調査結果は資料編 P61

質問方法



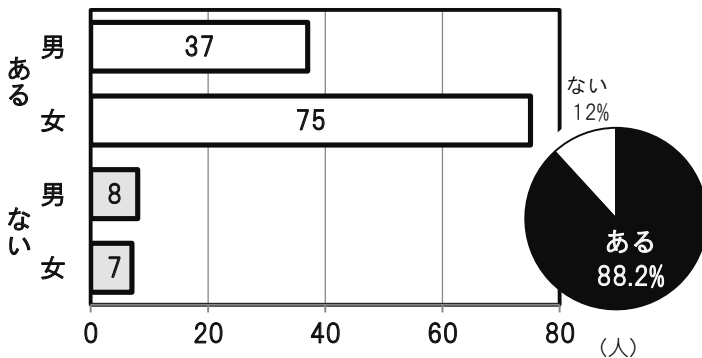
前半の質問では YESかNOかを聞き、ボードにシールを貼りました。シールの色で、男女を分け、数を把握しました。

後半の質問では、参加者から自由に意見を聴いて、ポストイットに書き込みました。ボードにポストイットを貼り、他の参加者の意見を見ることができるようになりました。

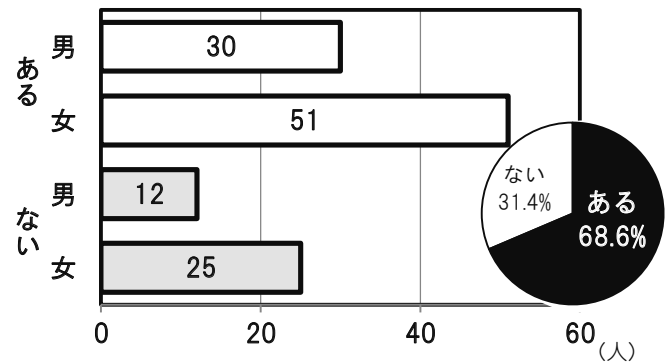


区民の声

Q 1. ボランティア活動に関心がありますか？



Q 2. ボランティア活動に参加したことがありますか？



Q 3. ボランティア活動に参加したきっかけは何ですか？

- ・ 友人に誘われた、お願いされたから
- ・ ボランティア団体に友人・知人がいたから
- ・ 活動に関する情報を見て、おもしろそうだったから
- ・ そもそも興味がある活動だったから
- ・ 講座・体験等を受けて、参加したいと思ったから
- ・ 広く受け入れる活動（震災ボランティア等）だから
- ・ 時間ができたから

Q 4. どんなきっかけがあれば参加しますか？

- ・ 友人・知人に誘われれば（入っていれば）参加したい
- ・ 時間ができれば、体調が良くなれば参加したい
- ・ 様々な活動内容の情報が入れば参加したい
- ・ 自分にできることがあれば参加したい
- ・ 興味があれば、気に入ったものがあれば参加したい
- ・ 新しい出会いがあれば参加したい
- ・ 講座・勉強会等があれば参加したい

Q 5. 気軽に参加できるようになるには何が必要だと思いますか？

- ・ ボランティアに関する情報を得られやすくする必要がある
- ・ きっかけや、背中を押す仕組みが必要である
- ・ 自分の能力を活かせる活動があるということを知りやすく示す必要がある
- ・ 活動の時間にあまり縛られないようにする必要がある
- ・ ボランティアについて相談できる場所があるとよい
- ・ 人間関係等の問題に関わらないようにしたい
- ・ みんなで活動する楽しさをPRする必要がある

下線部は特に多かった意見です



詳細な調査結果は資料編 P64・65

意見交換を終えて・・・



- ・情報が必要との意見が多かった。発行されているボランティア関連の冊子が知られていないと感じた。
- ・友達に誘われたら参加するという声が多かった。仲間作りがボランティアにつながることを実感した。
- ・健康寿命のキャッチフレーズに共感してくれた人が多かった。
- ・定年になったら趣味やボランティアを考えたいと話す人が多かった。
- ・ボランティア活動をしていないと回答しているのに、よく聞くと様々な活動をしている方がいた。ボランティアとは何だろうと、改めて疑問に思った。
- ・女性の回答者で、夫が既に活動しているが、自分は働いているので定年後に探したいとの意見もあった。今まで、定年を迎え、家に籠っている男性をイメージして審議を進めていたが、必ずしもそのようなケースだけではないことがわかった。
- ・身近な場所よりも、自宅とは少し離れた場所で活動したいという話もあった。
- ・東京オリンピックのボランティア活動に参加したいとの声が多かった。
- ・話が弾んで、自分が取り組んでいる活動について、話が止まらなくなる回答者もいた。

(提言の方向性)

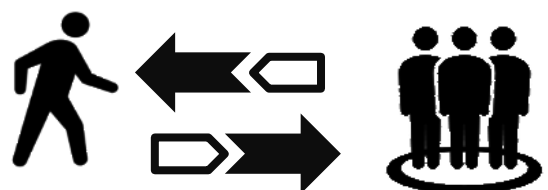
意見交換を踏まえて、どのような方向性で提言をまとめていくのかを検討しました。

■主な意見

- 参加への「あと一押し」が重要。それが「友人や知人の誘い」なのかもしれない。
- 地域に友人等がいるという前提での話なので、地域内に友人等が少ない人（特に男性の場合）に対しては別の仕掛けが必要ではないか。
- 話を聞くとボランティア活動を始めようと思いつききっかけは、人それぞれで異なる。その一步を踏み出す人のストーリーづくりに協力したい。何かしらの特技があると教えたいという気持ちから外に出る。
- 団体には入りたくないが、単発のイベント型のボランティア活動ならばやりたいと思う人もいる。
- 単発と長期的に活動が必要なボランティアは性質が異なるので分けて考える必要があるが、踏み出す人にとってはメニューの違いに過ぎないのではないか。
- 次のステップに繋がる講座があちこちにあるとよい。まだまだ活躍できる場があると思わせるような仕掛けが必要だと思う。
- そもそもボランティアが増えることは豊かな地域社会を築くという前提があってこそその話。そのことをまず周知することが大切。ボランティア活動は一石五鳥といってもいいほどの価値がある。
- ボランティア情報が欲しい人に対して、メール配信で情報が送られる仕組みがあると入りやすい。
- 意見交換の際も情報発信があれば参加するという話が多かったが、現在も既に様々な媒体で発信はされている。団体が出している情報が、受け手の区民に十分に届いていない現状がある。
- 一方で団体側もボランティアがほしいと思っているところは多い。しかし、どのように集めたらいいのかわからない。団体も相談する場所が必要である。

👉 提言の方向性

ボランティア活動へ一歩を踏み出したい人
ボランティアを集めたい団体
その双方からの 流れをよくする



「流れをよくする」イメージ

地域社会全体にボランティアについての意識が浸透している。

流れ① 効果的な情報発信

(団体 → 区民)

例：大量に発信されているボランティア関連情報を一元的に管理し、ボランティア活動に関心のある人に向けて効果的に発信されている。

流れ② 参加への一押し

(区民 → 団体)

例：ボランティア活動に興味を持つ人に対し、参加に向けての一步を支援する講座等、背中を押す仕組みがあり、シニア世代等の地域デビューの支援体制が整っている。

①と②が上手く組み合わせたり、ボランティア活動に参加したい人とボランティアを集めたい団体とのマッチングが円滑に進んでいる。

世田谷ボランティアセンターへの視察

委員6名が社会福祉法人世田谷ボランティア協会が運営する世田谷ボランティアセンターに訪問し、ボランティア相談担当の職員から話を伺いました。

目的 30年を超えるボランティアセンターの運営から、提言に向けてのヒントを学ぶため

結果 ・ボランティアセンターと3カ所の地域の拠点（ビューロー）で、バザーの収益金や寄付金などの自主財源と地域のネットワークを活用し、ボランティア活動に関する事業を定着させている。

・相談窓口の他、人と団体を繋げる仕組みの「おたがいさまbank」等の運営や、情報誌「セボネ」を発行している。

・それぞれの施設に相談窓口があり、ボランティアコーディネーター（職員）が相談に応じている。コーディネーターは原則として面談により、一人ひとりにあった活動や団体の紹介に努めている。また、勤め人や学生も利用できるように、ボランティアセンターでは平日（一部）の夜間も窓口を開いている。

感想 ・世田谷区はボランティアが生活の中に溶け込んでいるようだ。ボランティアセンターに行けばやりたいことが見つかる環境が整っている。



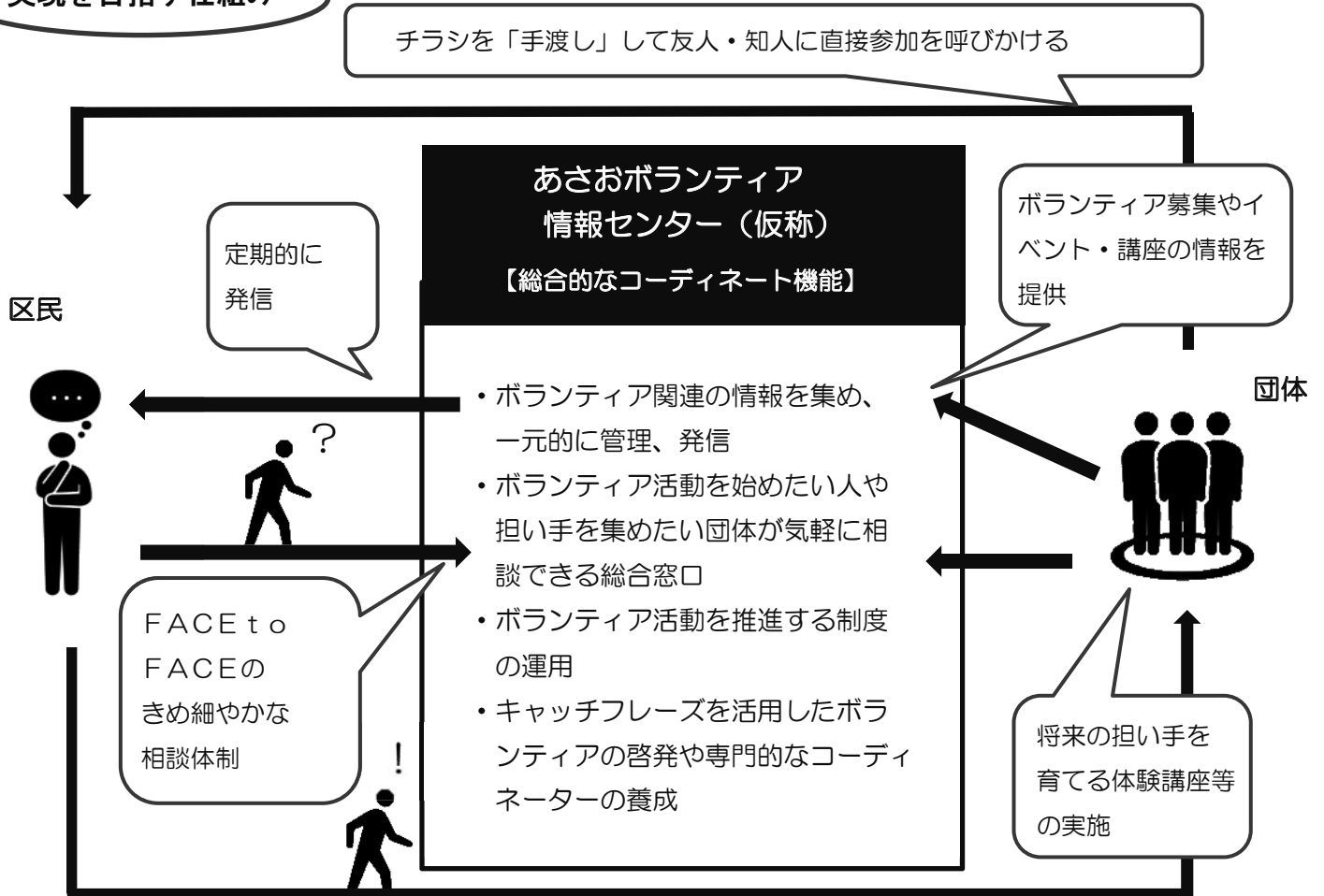
地域の拠点となっている世田谷ボランティアセンター

詳細な調査結果は資料編 P62

(提言内容の検討)

ボランティア意識が浸透している社会では、ボランティア活動に参加することも、また、ボランティアを受けることも、身近に感じる環境が生まれています。そこでは区民の誰もが、ボランティア活動に気軽に参加できる仕組みが整っているものと思われます。

実現を目指す仕組み



区民会議フォーラム「健康寿命を延ばすには？」の開催

平成28年2月21日、区民にボランティアに目を向けてもらうことを目的として、「健康寿命を延ばすには？」をテーマに区民会議フォーラムを開催しました。

東京都健康長寿医療センター研究所の藤原佳典氏から、シニア世代が地域とのつながりの中で楽しく健康に暮らすためのヒントを伺いました。部会の活動としても当日はパネルの展示や相談窓口のチラシの配布を行いました。

アンケート結果から推測すると、約35名の方がボランティアをしたことがないとの回答でした。更に、ボランティア活動の参加経験の有無を男女別に分析したところ、女性で参加したことがあると答えた方は48.6%であったのに対し、男性の方は40.6%でした。（全体は45.1%）

今まで参加したことのない方々（特に男性の方）にとって、今回のフォーラムが「ボランティア活動への一歩」につながる機会となりましたら幸いです。

（詳細な結果は P35・36）

理想的な仕組みの構築に向けて、どのような機能が必要なのか、具体的にアイデアを出し合いました。
 アイデア出しの際には、縦軸に「効果的な情報発信 — 参加への一押し」、横軸に「基礎的な仕組み — 理想的な仕組み」をとり、大まかなグループ分けをし、提言の組み立てを検討しました。

効果的な情報発信（団体からの視点）

情報発信（効果のある場所、タイミングで）

- ・手渡しは効果的だが大変
- ・地域情報紙、市政だより等を活用しデータベース・相談窓口があることを知らせる

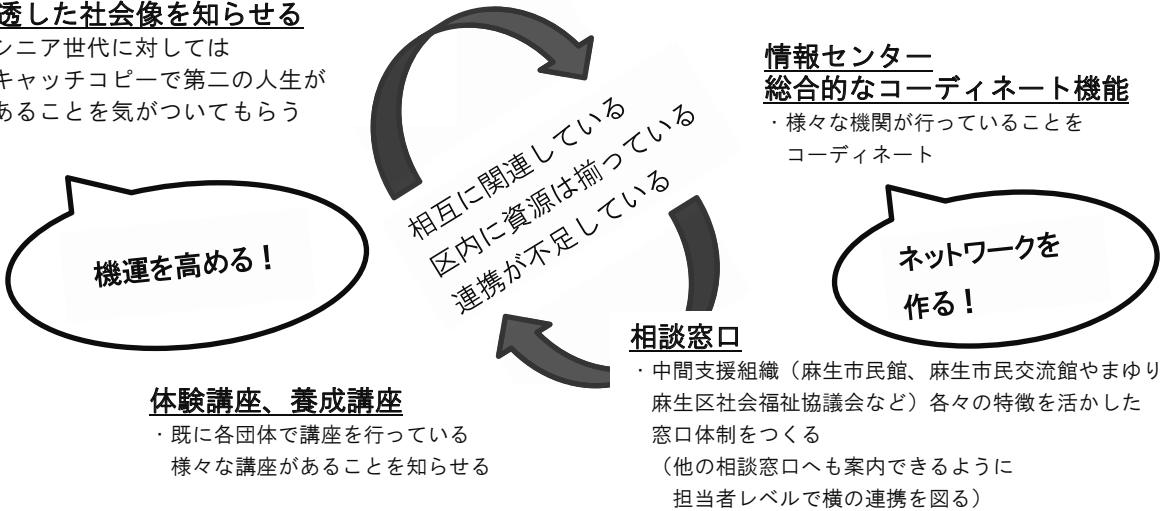
ボランティアが浸透した社会像を知らせる

- ・シニア世代に対しては
キャッチコピーで第二の人生があることを気づいてもらう

**情報センター
総合的なコーディネート機能**

- ・様々な機関が行っていることをコーディネート

基礎的な仕組み



体験講座、養成講座

- ・既に各団体で講座を行っている
様々な講座があることを知らせる

相談窓口

- ・中間支援組織（麻生市民館、麻生市民交流館やまゆり、麻生区社会福祉協議会など）各々の特徴を活かした窓口体制をつくる
（他の相談窓口へも案内できるように
担当者レベルで横の連携を図る）

参加への一押し（区民からの視点）

アイデア出しをしたところ、まず先に取り組むべき部分は「ボランティアが浸透した社会像」を伝えること、提言の最終目標は「あさおボランティア情報センター（仮称）」であることを改めて確認しました。またボランティアの推進に向けて、既に区内にある多くの存在が、十分に知られていないことに気がつきました。

そこで、知られていない活動や組織、制度、地域資源等を、どのように伝え、どのように組み合わせ、どのように「つながり」をもたせるのかという視点を提言の中に入れることにしました。

ボランティア活動に関わる麻生区内の多くの存在



区民

- 例えば
- ・ボランティアに関心があるが、参加に躊躇している区民
 - ・何をしてもなくなると毎日“もやもや”と過ごしているシニア世代
 - ・区内各地で市民団体や地域団体取材している区民記者
- 約17万5000人の方が区内に住んでいる。更に在勤、在学の方もいる



団体

- 例えば
- ・麻生市民館や麻生市民交流館やまゆり、学校等、各施設で活動している市民団体
 - ・暮らしやすい地域づくりを進めている町会・自治会
 - ・里山フォーラムや麻生区社会福祉協議会等、各分野に関係する団体など
- 様々な分野で、様々な場所で、様々な団体が多様な活動をしている



機関・施設

- 例えば
- ・麻生市民館、麻生市民交流館やまゆり、麻生区社会福祉協議会の相談窓口
 - ・区役所や道路公園センター、地域みまもり支援センター等の行政機関
 - ・いこいの家や老人福祉センター、スポーツセンター、図書館など
- 直接、間接的にせよ、ボランティアに関わる機関、施設は多数ある

第4章 区民会議フォーラム～健康寿命を延ばすには？～

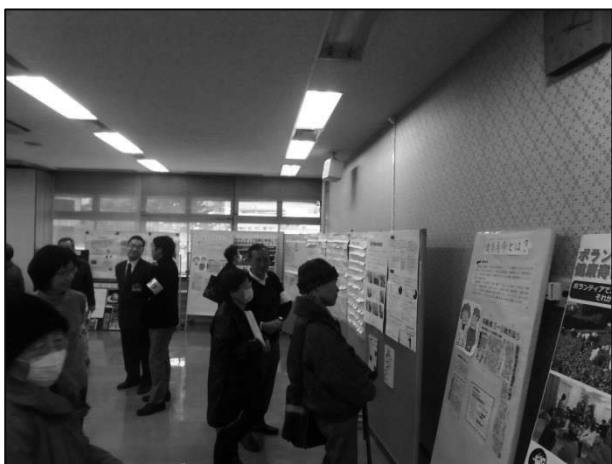
麻生区区民会議の市民活動・地域活動の活性化部会では、「ボランティア活動の促進」をテーマに掲げ、ボランティア活動に気軽に参加できる仕組みづくりについて審議しました。

このフォーラムは、何をすることもなく、なんとなく毎日過ごしているシニア世代の方にボランティア活動に目を向けてもらうことを目的として開催しました。

はじめに、第5期区民会議における企画部会および2つの専門部会から審議経過を報告しました。

続いて、フォーラムテーマである「健康寿命を延ばすには？」に関して高齢者の社会参加と健康維持について研究されている藤原佳典先生に講演をしていただきました。講演内容については、95%以上の参加者が参考になったと回答しました。

会場内には、市民活動・地域活動の活性化部会が作成したパネルや区民会議を紹介するコーナーを設置しました。



展示コーナー



会場の様子

【開催概要】

開催日時：平成28年2月21日（日） 午後1時30分～午後4時00分

開催場所：麻生区役所4階第1・2会議室

参加人数：110人（区民会議関係者等も含む）

【当日プログラム】

委員長あいさつ（金光委員長）

区民会議報告

- ① 企画部会（高倉部会長）
- ② 若い世代が住みやすいまちづくり部会（白井部会長）
- ③ 市民活動・地域活動の活性化部会（岡倉部会長）

講演：藤原 佳典氏（東京都健康長寿医療センター研究所

社会参加と地域保健研究チーム 研究部長）

テーマ「健康寿命を延ばすには？」



講演:「健康寿命を延ばすには？」

東京都健康長寿医療センター研究所部長 藤原佳典氏

講演内容・要旨

○シニアの社会参加について

- ・ 研究所で調査している「健康長寿の10か条」では、生活習慣病の予防・老化の予防の2つのタイプに分けています。生活習慣病の予防は煙草や過食等の節制を、老化の予防は積極的な生活を指しています。これからは、生活習慣病の予防だけでなく、老化の予防についても考えて頂ければと思います。



○外出と交流について

- ・ 数多くの論文を集めて調査したところ、BMIや、飲酒や喫煙を嗜む人よりも社会とのつながりが少ない人の方が死亡率に与える影響が大きいとのデータが出ています。
- ・ 孤立しないということは、高齢者の問題だけではありません。できるだけ多くの知り合いを作ることや個人的なつながりを構築していくことが、災害などのいざという時に役に立ってきます。
- ・ 孤立は、色々な危機と裏腹になりますから孤立している人やしそうな人は、行政や地域包括支援センターなどとつながっておくことが重要になります。

○交流を線から面へ=ソーシャルキャピタル

- ・ 交流を線ではなく、蜘蛛の巣のように張り巡らしていくことが大切になっています。ソーシャルキャピタルとは、地域でいえばお互い様や団結力を活かして、支え合うことを意味します。
- ・ ソーシャルキャピタルの中で大事になってくるのは、ボランティア精神ではないかと思います。つながりといっても、プライバシーの問題などで自然発生的には起こらないので、交流が出来やすい仕掛けを作ることが重要です。その仕掛けで大切なのは、まずはシニアの方からボランティアをスタートしてほしいということです。

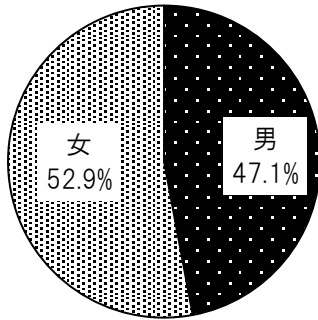
○具体的な事例

- ・ 家族の問題が複雑化しているため、多世代が関われる仕組みが重要です。例として、シニア世代からの子どもへの絵本の読み聞かせ「りぷりん」とプログラムがあります。ボランティアとして、活動するのは、1人週1回程度ですが、読む練習や本の選定や反省会など、ボランティアのサイクルができています。
- ・ 健康に自信を持っている人は、プラス思考で健康によい取組をやっており、さらに前向きになるなど、プラスのサイクルに入ります。ボランティアが生活の一部になっていることが自分の健康意識へとつながり、長続きしているのではないかと考えられます。
- ・ 麻生区の20～30年先を考えると、多世代の連携が必要になっていきます。ボランティアも代替わりしていけるような仕組みになっていくとよいかと思います。
- ・ ボランティアを長続きされている方に話を伺いますと、相手の都合で上手くいかなくても寛容な気持ちで受け止め、ボランティアできている状態に感謝をすることが、楽しむコツであるとのこと。

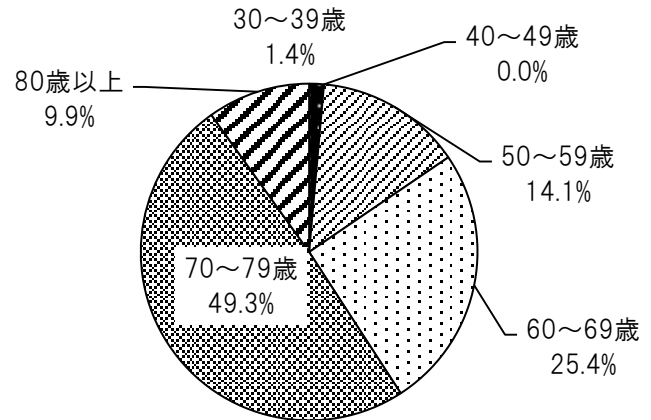
麻生区区民会議フォーラム アンケート集計結果

アンケート回収数：72枚

参加者 性別

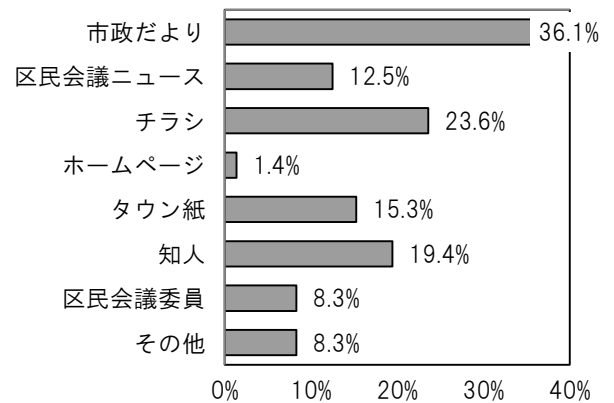
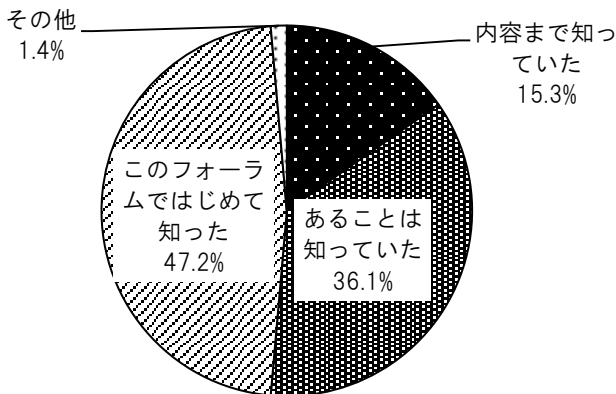


年齢

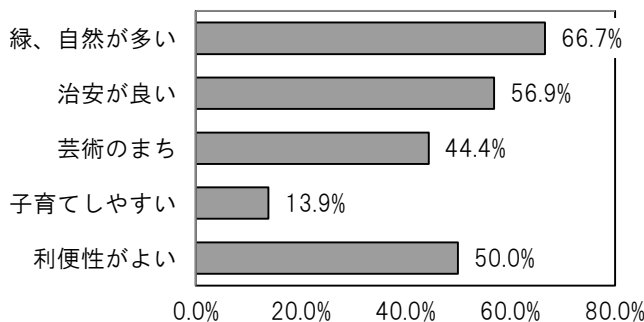


(1) 「麻生区区民会議」をご存知でしたか。

(2) 「麻生区区民会議フォーラム」の開催をどちらでお知りになりましたか。(いくつでも)



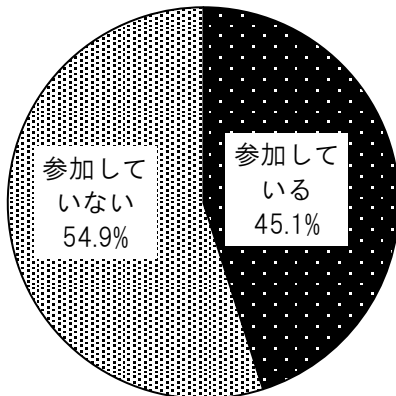
(3) 若い世代が魅力と感じている次の項目について、麻生区の魅力と感ずるものはどれですか。(いくつでも)



自由コメント欄

- ・ 地盤が強い、津波などには関係ないので安心
- ・ まことに静かです
- ・ 住宅街、路面のゴミが無い

(4) 現在、ボランティア活動に参加していますか。参加している場合はどんな活動に参加していますか。



主な活動

- ・ 公園美化
- ・ 公園等での健康体操
- ・ 里山の維持管理、アルテリッカしんゆりなど
- ・ 祭りの手伝い
- ・ 自治会、町連他
- ・ 学童ボランティア
- ・ 将棋ボランティア週4回老人施設
- ・ メンタル支援活動、町内の安全パトロール
- ・ 障害者の支援
- ・ 子育て支援、シニア活動、町内会活動ボランティア

(5) フォーラムのご感想や、区民会議へのご意見ご要望などをご記入ください。
(主な意見など)

- ・ 頭で分かるが、実際に一步踏み出すことが難しいのが実情。何が出来るかでなく、何が求められているかを知れる機会があれば、はじめの一步となるかもしれないです。
- ・ 麻生区の男性は平均寿命も長く、一戸建てが多いので、経済力、知的能力も高い方が多いので、今回の区民会議の部会長の方々の熱意あるお話しをお伺いして、期待が高まりました。
- ・ ボランティアといいますが、完全無料でなく、交通費とかまたはポイントをつけて、たまったら自分の老後にそのポイントを使えるとか、何かメリットがある方法の方が、やる気がおこるのではと思いました。
- ・ ボランティアについて、自分に何が出来るのか、考えてみたいと思いました。
- ・ もっと多くの人に参加して（聞いて）いただけたらと思います。
- ・ すばらしい講演で、高齢期の生き方に大きなヒントになりました。
- ・ 自分としても気がついていないことの説明があり、参考になりました。
- ・ とても良いフォーラムを開催して頂いて感謝します。点→線→面へお互い様関係を広げていく中で、点、線の活動は多いが、面の活動が少ない、市民の活動の最大の課題ですが、具体化しやすい方策を期待します。
- ・ ボランティアをしたい人、ボランティアを探している人、ボランティアに関する総ての情報を一本化していただけると大変ありがたいです。
- ・ 自分の今後の老化防止に少しでも役に立つことは、外に出ること、人に会うこと、自分にできることを外部に発信すること、行動することなのだと思います。
- ・ ボランティアに一步踏み出してみようかと心が動きました。自立した老後を送るためにも楽しみながら、行動に移したいと思います。
- ・ 外出、ボランティア活動の重要性がよくわかりました。やりたくて参加し、月1回以上参加できるようなシステムの構築が必要と思われる。そのためには、継続化が大切で持続可能なことが必要と思います。
- ・ イメージで分かっていると思っていた内容をより具体的、数字で明確に認識できました。実際にアクションを起こす事が出来ない人（自分）には良い講演でした。
- ・ 今は仕事に追われており、地域への参加が困難ではあるが、将来的には何らかの形で地域への活動に取り組んでいきたいです。
- ・ 外に出て他人と話し前向きで明るい生活にしようと思います。

第5章 提言

1. 「若い世代が住みやすいまちづくり部会」からの提言

【提言にあたって】

若い世代が住みやすいまちづくり部会では、今後、高齢化とともに生産年齢人口の減少が進むことや、空き家の増加が予想されることから、シニア世代の活躍はもちろんのこと、若い世代が転入し、安心して住み続けてもらうため、「麻生区の魅力のブランド化とPR」と「空き家の利活用」について検討してきました。

調査審議の結果、麻生区は「若い世代が住みやすいまち」としての魅力にあふれていること、空き家の利活用についても、大学や事業者等により様々な取組が進められていることがわかりました。その一方、「PRのため魅力づくりに取り組む団体の活動が連携していくこと」、「魅力についてさらに周知・PRしていくこと」、「空き家の利活用について地元の理解を得ること」が必要であると考えます。今後、若い世代が住みやすいまちづくりを進めていくため、次の3つの方向性から、4つの提言を取りまとめました。

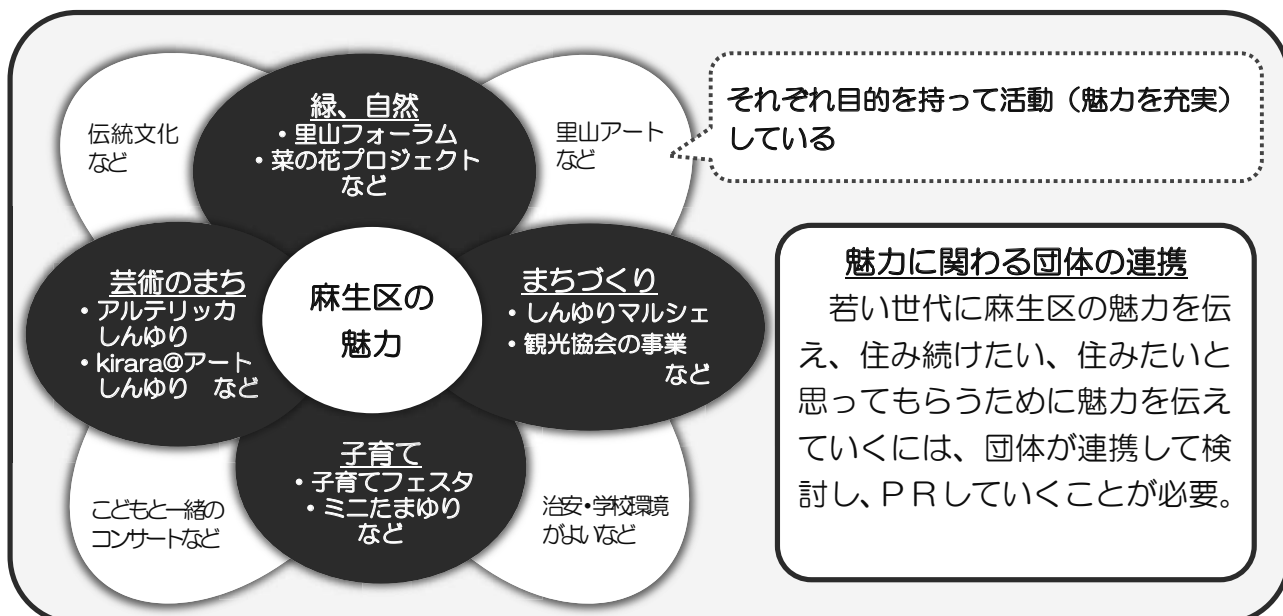
- I 魅力に関わる団体の連携
- II 魅力の情報発信
- III 空き家の利活用

I 魅力に関わる団体の連携

提言1 区民と行政が協働した組織体制をつくり、具体的な検討・取組を進める上で、「区民会議」を活用することや、「(仮称)麻生区魅力PR委員会」の設置を提案します。

《趣旨》

- 現在の麻生区には、さまざまな魅力に関わる団体が活動していますが、それらが個別的・散発的であり、調和・連携していくことが必要と考えられます。
- 若い世代が「楽しい」「面白い」と感じ、「住み続けたい」「住みたい」と思ってもらえるまちにするためには、麻生区の魅力に関わるさまざまな団体が連携し、麻生区の魅力を高めて発信していくことが必要です。

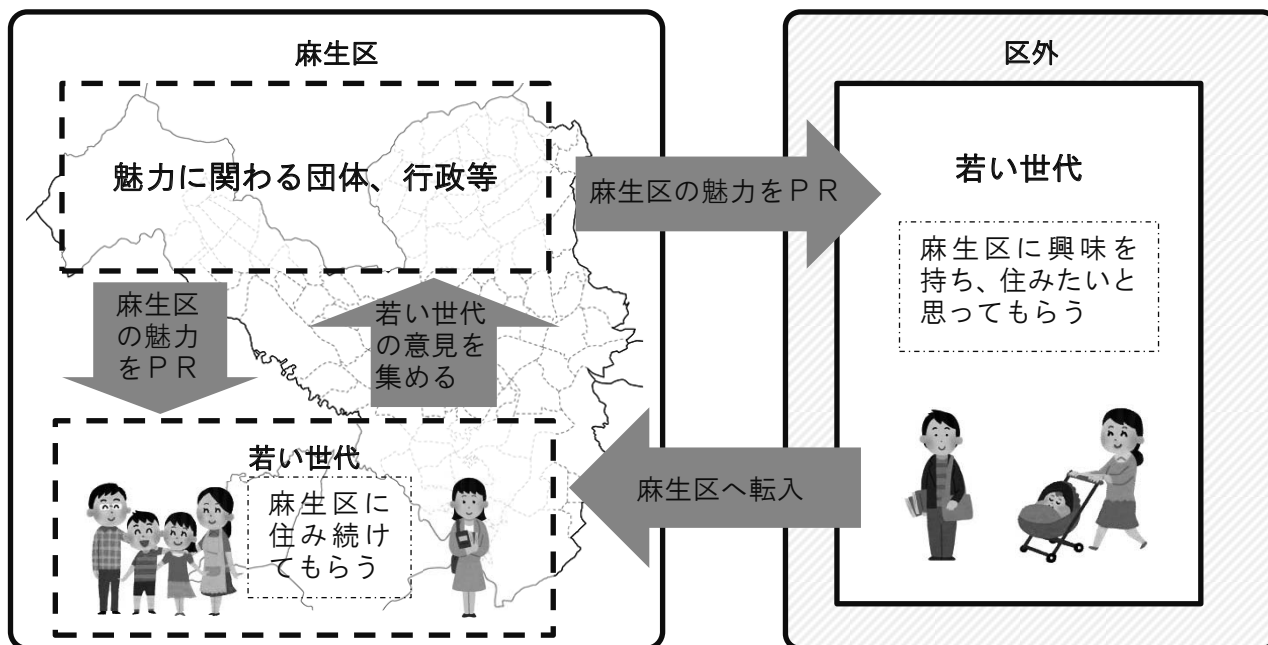


- 区民会議の活用の例としては、区民会議には様々な魅力に係る分野からの参加があることから、次期区民会議のテーマの一つとして「麻生区の魅力のブランド化とPR」を継承し、検討してもらうことを求めます。
- 区民会議を核として、魅力に係る多様な主体の連携による検討、イベントやフォーラムの実施等の具体的な取組を進めることも考えられます。

II 魅力の情報発信

〈趣旨〉

- 「若い世代」（生産年齢人口等）をターゲットに麻生区の魅力をPRし、麻生区を住まいとして選択してもらえる取組を進める必要があります。



提言2 麻生区の魅力をPRする方法として、「麻生区のホームページの改善」と「（仮称）麻生シティセールス・PR部門」の設置を提案します。

- 魅力をPRする上で、特にホームページは重要であり、早急に内容を充実させ、魅力をわかりやすく発信していくことが求められます。
- 魅力やブランドを分かりやすく表示するテーマカラーや統一されたデザインによるサインの検討等、魅力のPR方法についてはさらなる検討が必要であり、特に、新百合ヶ丘駅周辺における重点的な取組が期待されます。また、行政内にPRの担当部署を設置することについても検討が必要と考えられます。

提言3 麻生区の魅力をブランド化し、効果的にPRをしていくための「キャッチフレーズ」を検討し、活用していくことを提案します。

- 麻生区にあるさまざまな魅力を集約し、若い世代を呼び込むための分かりやすいキャッチフレーズが求められています。例として、「いなかのある都会」を検討しました。
- 若い世代を呼び込むためのキャッチフレーズであることから、このような例を明示し、学生を含めた若い世代の意見を募集し、明確化していくことが考えられます。

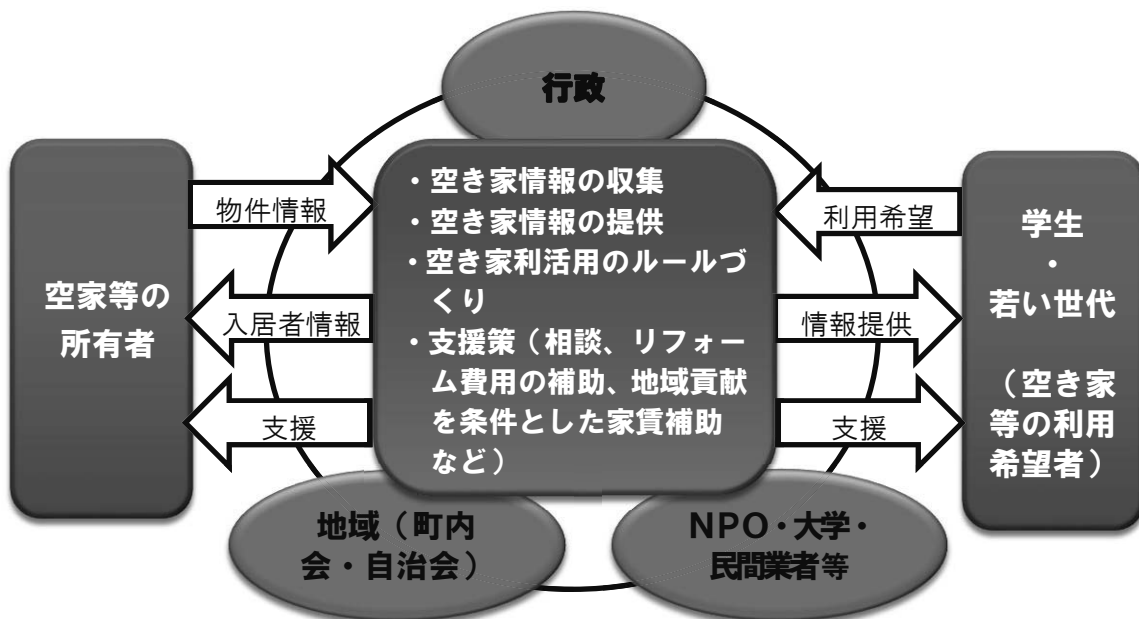
Ⅲ 空き家の利活用

〈趣旨〉

- 麻生区は昭和40～50年代を中心に宅地開発が進んだことにより、現在、これらの住宅地では高齢化の進展とともに空き家が増加してきています。また、空き家の増加に伴い、地域の荒廃の進行が想定されることを踏まえ、これらの空き家を、新たな麻生区民の住まいとして利活用していく取組を進める必要があります。
- 空き家の利活用のターゲットとしては、多くの大学が立地する麻生区の特徴を活かし、シェアハウス等、大学の学生の住まいとしての活用が考えられ、このような取組は、「地域の中に若者が住む」ことを通して、高齢者が安心して住み続けられる地域づくりや、地域のコミュニティの強化にもつながることが期待できます。
- 調査の結果、日本映画大学では、シェアハウスに対する学生のニーズが具体的に確認でき、区内では民間事業者による女性専用のシェアハウスの事例が存在することも確認できました。
- 学生や若い世代と空き家所有者とをうまく繋げたり、地域のコミュニティ活動等への貢献を条件に学生の入居を支援することや、町会への加入を促す等、一定のルール作りを進めるなど、地域（町会等）、NPO・民間業者等の連携による地域ぐるみの仕組みを行政がコーディネートし検討する必要があります。

提言4 学生・若い世代や地域（町内会・自治会）、NPO・大学・民間業者等による地域ぐるみの仕組みとして、「空き家ネットワークの構築」を提案します。

- 空き家のネットワークを構築するため、次のとおり検討を進め、実施していくことが考えられます。
 - ①空き家の実態把握を行うとともに、現在区内で進められている空き家の利活用の事業等について調査・ヒアリングを行い、それらをモデルケースとして、得られた効果を踏まえ、さらに効果的な対応策の検討を進める。
 - ②実態を踏まえた、空き家所有者等からの情報提供と、利活用に向けた仕組み・地元の理解・協力を得るためのルールづくりや、支援策を検討する。
 - ③空き家の利活用に向けて、大学やNPO・民間事業者等との連携体制を整備する。
 - ④以上を踏まえ、地域、大学・NPO・民間事業者が連携し、行政の支援を得ながら実施していく。



2. 「市民活動・地域活動の活性化部会」からの提言

【提言にあたって】

■ ボランティア活動に参加する人を増やしたい！

市民活動・地域活動の活性化部会では、「ボランティアの活動促進」をテーマに掲げ、ボランティアに関心が高いと思われるシニア世代の方々を念頭に置き、ボランティア活動をしたい人や関心のある人など「誰もが気軽にボランティア参加できる仕組みづくり」を目標にして審議してまいりました。

調査審議の結果、仕組みづくりのためには、区内にある多数のボランティア関係団体や組織、制度等を最大限に活用し、ボランティア参加する人の視点に立って「ボランティア活動に気軽に参加できる環境を整えること」が必要であると考えます。今後の市民活動・地域活動の活性化策として、次の3つの方向性から、4つの提言を取りまとめました。

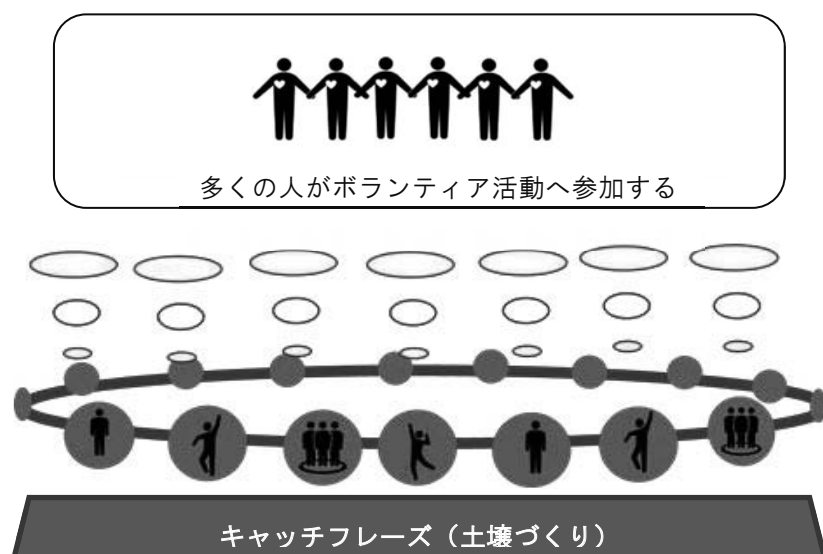
- I ボランティア活動の土壌づくりに向けて
- II 「あさおボランティア情報センター（仮称）」の設置に向けて
- III ボランティア参加のきっかけづくりに向けて

I ボランティア活動の土壌づくりに向けて

提言1 誰もがボランティアを身近に感じ、ボランティア活動に参加しやすい機運を高めるために「ボランティアのまち・あさお」を掲げることを提案します。

〈趣旨〉

○ ボランティア活動が浸透した、人と人が支え合う暮らしやすい地域社会を将来イメージとして、「ボランティアのまち・あさお」を掲げることで、ボランティア活動の土壌をつくることができ、区民が参加しやすい機運が高まり、普段からボランティア活動を身近に感じることができるようになると考えます。



○「社会奉仕」「自己犠牲」といった従来のイメージの他に、「参加することは人のためだけでなく自分の健康のためにもなる」といった新たなボランティアイメージを示すなど、ボランティア参加への心理的なハードルを下げることで、地域社会全体にボランティア活動に参加しやすい雰囲気をつくりだすことが必要です。

○イメージを提示する際は、効果的なキャッチフレーズを検討し、活用することを提案します。

ボランティア活動をPRする際は、区民の心に響くキャッチフレーズ（部会では「健康寿命」をキーワードとしました）を活用することが有効であると考えます。ボランティア活動の担い手として、経験豊かなシニア世代の存在が注目されていますが、シニア世代の心に訴える場合は、地域の中に活躍の場所「第二の人生」が待っているということを知らせることが必要です。

Ⅱ 「あさおボランティア情報センター（仮称）」の設置に向けて

提言2 「あさおボランティア情報センター（仮称）」を拠点とした、ボランティア参加のネットワークを構築することを提案します。

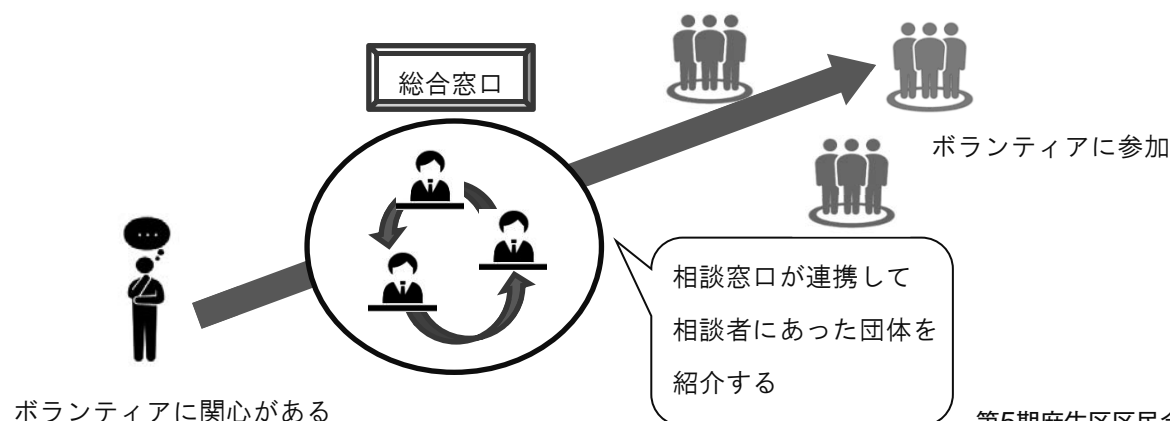
《趣旨》

○区内には市民団体・地域団体が多数あり、様々な活動がなされています。また、中間支援組織（麻生市民館、麻生市民交流館やまゆり、麻生区社会福祉協議会など）の相談窓口の他、活動の紹介冊子や、シニア向け講座等、参加につながる資源が既に区内に多数あります。しかしながら、これらの存在が区民に知られておらず、十分に活用されていないという現状があります。

○本部会では、地域に多数あるボランティア資源を活用して、関心のある区民の方々を様々なボランティア活動につなげるための仕組みとして「あさおボランティア情報センター（仮称）（以下「センター」といいます。）」の設置を提唱します。このセンターは総合的なコーディネート機能を有し、人や団体、資源をつなぐ役割を担います。

○センターは、ボランティア社会への「旗振り役」を担い、ボランティア活動を推進する制度の運用を行います。また、センターに行けばボランティアに関する情報が分かるという、拠り所としての役割を果たすとともに、ボランティアを募集する団体に対して、ボランティア受け入れのノウハウを提供する機能が必要です。

○現時点では、センターは、区内の機関の連合体をイメージしています。まずは、中間支援組織や市民活動を支援する区役所が連携し、情報やボランティア活動支援のノウハウを共有して、ボランティアに関心を寄せた人を相応しいボランティア活動につなげていくことが必要です。たとえば、各相談窓口がお互いに情報やノウハウを共有し連携した上で、ボランティア参加のネットワークの総合案内窓口をつくることも考えられます。



- 総合案内窓口には、ボランティア活動を始めたい人や担い手を集めたい団体が、気軽に相談できるよう、「FACE to FACE」のきめ細やかな相談体制が求められます。
- 行政機関は、ネットワークの構築に向けて、地域社会の各々の課題に目を向け、各団体、機関の持つ強みを活かす、弱みを補完する等、コーディネート機能を果たしていくことが必要です。
- 本部会では、様々な市民活動団体で活躍している委員が集まって話し合い、お互いの活動を知り、つながることができました。ボランティア参加のネットワーク構築にあたっては同様に、周囲の団体や機関がつながりながら進めていく必要があります。

Ⅲ ボランティア参加のきっかけづくりに向けて

提言3 ボランティア情報の効果的な発信とともに、情報の一元化の取組を進めることを提案します。

《趣旨》

- 情報を発信することで、ボランティア活動をしたい人と、ボランティアを求めている人・団体とを、より一層つなげることが必要であると考えます。
- シニア世代に、ボランティアに関する情報を周知する際には、図書館や麻生老人福祉センター、スポーツセンター、公園健康体操等、シニア世代が集まる施設・場所に、定期的に情報を発信していくことが有効であると考えます。相談窓口等の周知にあたっては、多くの方に読まれている市政だより区版や地域情報紙を活用し、その存在を知らせていくことが効果的であると考えます。
- 情報を団体等のタイミングで発信するのではなく、ボランティア活動に関心のある人のニーズを把握して、必要とする情報をタイムリーに届けることが必要です。
- ボランティア活動に関する情報を、区民に効率よく伝えるには、様々な団体・機関から発信されている情報を一元化する必要があります。ICT（情報通信技術）の活用により、情報のプラットフォーム化は徐々に進んでいますが、依然として各施設の窓口に紙媒体が多種多様にあり、団体が作成したチラシが、必要としている区民に届きにくい状態となっています。まずは、多くの団体が掲載された様々な総合冊子やデータベースがあるということ、また、様々な団体が集まるイベントやフォーラムが区内で開催されているということを区民に知らせる必要があります。

《情報の発信・一元化のアイデア》

○以下については、情報の一元化について、本部会で出されたアイデアです。

- 麻生区ホームページに市のボランティア情報を一元化する情報バナーの設置
- ボランティアに関心がある人がやってみたいことを発信するボランティアエントリー制度
- ボランティア情報を掲載した定期的な情報誌の発行

提言4 相談窓口の連携、入門講座や体験講座の開催等を通じて、ボランティアに関心を持った区民に対して「参加への一押し」をすることを提案します。

《趣旨》

- ボランティアに関心を寄せた区民に対しての受け皿が必要です。麻生市民交流館やまゆり、麻生市民館、麻生区社会福祉協議会等に設置されている相談窓口は、希望に適した団体を探す上で非常に頼りになる存在と考えます。区民のみならず団体にとっても身近な窓口になるように、それぞれの窓口の特色を活かしつつも、情報やノウハウの共有等、更なる連携が求められます。
- 入門講座や体験講座は、シニア世代の地域デビューの機会を提供するという点で、有効であると考えます。ボランティアの担い手不足に悩んでいる団体に対しては、初心者を受け入れるためのノウハウを提供し、入り口（受け皿）を広げるよう促していくことが必要であると考えます。また、講座の主催者に対しては、講座開催後に次のステップを知らせるなど、きめ細やかなフォローをして頂くことを望みます。
- ボランティア参加の動機は、健康のため、生きがいのため、自分の特技を活かしたいためなど、区民一人ひとり異なります。このことを踏まえ、各々の動機に沿った取組になることを期待します。

《参加への一押しをするアイデア》

○以下については、参加への一押しについて、本部会で出されたアイデアです。

- 区民自らが周囲の人をボランティア活動に誘う
- 区役所、図書館ロビー、イベント会場等で開設する臨時のボランティア相談
- 退職者セミナーの定期的な開催及び周知
- 交通費相当分を負担するボランティアポイント制度
- イベント、講座、短期ボランティア等に参加した人に、ボランティアに関する情報誌を送る

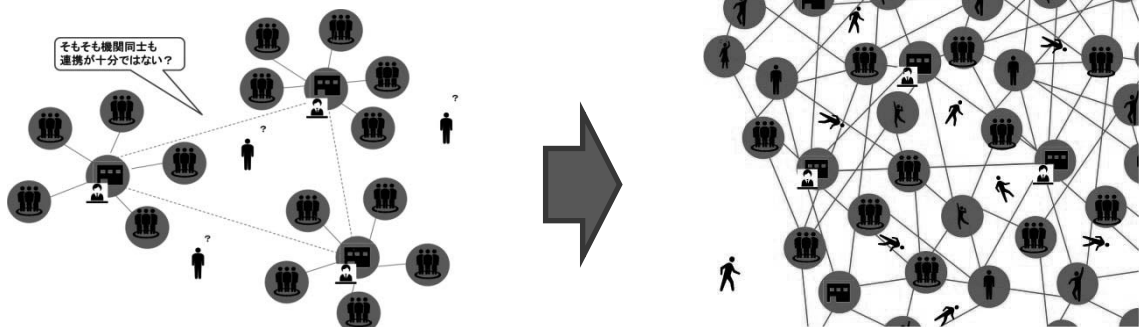
■実現に向けて

提言3及び4はセンターにおける機能として重要な役割を担うものと考えます。この内容はセンターだけでなく、現在活動している団体、機関等が取り組むことで、ボランティア参加のきっかけになると考えます。なお、効果的に実施するためには、「情報の効果的な発信と一元化」と、「参加への一押し」が関連していることを意識する必要があります。

おわりに

ボランティア参加へのネットワークの構築には、麻生区に関わる団体、そして区民の方々の協力が不可欠です。健康づくりのつどいでの調査結果によると、ボランティア活動に参加したきっかけとして最も多かった回答は、「周りの人からの誘い」でした。

毎日をもやもやと過ごしているご家族に声をかけてみる、友人、知人にボランティア募集のチラシを手渡しして誘ってみるなど、その一つ一つの行為もつながりであり、ネットワークの一部となります。人と人がつながることで、ネットワークが線から面へ、区全体へと広がり、暮らしやすい地域社会につながることを期待します。



3. 第5期区民会議を振り返って

○テーマの選定

第5期区民会議では、当初、麻生区内の課題について全委員による意見交換を行いました。それをベースとして、今後、超少子高齢社会を迎える麻生区で、区民会議全体テーマにも掲げた「心がかよう魅力あるまち あさお」をイメージし、子育て世代と主にシニア世代の社会参加についてテーマを絞り込み、調査審議を進めました。

具体的な審議は「若い世代が住みやすいまちづくり部会」と「市民活動・地域活動の活性化部会」で行いましたが、二つの部会での具体的な審議課題は、社会の状況および動向を踏まえたものになったと考えます。

○課題への取組

幅広い範囲での課題を調査審議するには限られた時間でしたが、「若い世代が住みやすいまちづくり」と「市民活動・地域活動の活性化」の二つの部会では、月1回の審議を行ったほか、必要に応じて関係部署へのヒアリングや見学およびイベントでのターゲット世代へのアンケート調査等を実施し、議論を深め、提言へつなげました。

企画部会は審議の進捗状況を共有しながら区民会議ニュースを通じて区民に報告しました。また、区民から寄せられた意見や提案には真摯に対応しました。

○提言の具現化に向けて

今回の区民会議で取り上げた課題には、既に分野別の先進的な取組が始まっている部分も含まれます。

提言の具現化については、麻生区をどのようなまちにしていきたいのか、区民の意見を踏まえ、区民にわかりやすいトータルな取組を麻生区全体で進めていくことが必要です。市民活動が活発な麻生区の特長を活かし、市民活動団体、町内会・自治会、ソーシャルビジネス事業者、企業や大学等、行政を含む多様な主体の協働・連携によるまちづくりに期待します。

○区民会議の活性化に向けて

区民会議フォーラムの開催周知が短期間であったにも関わらず、参加者が多かったことは、区民会議の認知度が向上していることを示していると思います。

しかし、地域社会の課題解決の主体は市民にあることを踏まえると区民会議の認知度を更に高め、多くの区民に関心を持ってもらい、区民会議に参加してもらうことが不可欠です。そのためにも、様々な世代からの参加が可能となるよう、委員の募集および選出の手法や会議の持ち方に、更なる工夫が必要だと考えます。

また、地域課題の更なる解決に向けては、幅広く、より深い調査審議も必要だったという反省を踏まえ、区民会議における審議テーマを次期区民会議に如何につなげるかが課題であると考えます。